

著作✿黒井メラ

挿絵✿町田ナツメ



日本よ、これもBシだ。

※本人がそう言ってるので間違いないと思います。

B級映画大好き大学生くん、昔に戻りたい二十九歳社会人くん、  
草食系アルバイトくん、社畜で疲労困憊営業マンくん——  
生きるのって面倒だけど大人はみんなそうやって我慢してる。

# 目次

そのいち

「あの顔から毛の出た猫みたいなヤツね」

そのに

少年王国の崩壊

そのさん

サイレン〜僕が××工場にいた頃の話〜

そのよん

ワールド・エンド・サーカス

人生は必ずしも

思うようになるとは限らない



生まれて初めて、アニメ以外の映画を映画館で見たのは確か小学校一年生の頃だ。ませた姉に連れられてその年に流行ったファンタジー大作を見たのが最初だったわけだが、それ以来映画というものに興味を持つようになり小学校を卒業する頃には既に百本以上もの映画を網羅した『映画博士』と呼ばれるようになる。

それで、中学くらいでは自ら映画を作りたいと考え、高校の時は自分で『映画製作同好会』を立ち上げて安っぽい色々な映画を八ミリカメラで沢山撮った。ハリボテのモンスターに襲い掛かれて、「うわー」と棒読みの悲鳴を上げる大根役者たちの演技が光るその作品『悪夢のえじき』は高校の文化祭にて公開され、そのあまりのショボさに嫌～な意味で話題になった。それから卒業するまでの間はずっと『えじきくん』等という妙なあだ名で呼ばれ続けていたが、まあ注目されただけいいだろう。……と、前向きに考えておく。

吉木青年は、そんな経歴を持つ本物の映画バカだった。

映画好きをこじらせて、吉木はとうとう映像制作の専門学校にまで進学する事となる。親は分かり切っていたのかそこまで反対もせず、「後できちんと学費を返してくれるんならいいよ」と案外あっさり承認してくれた。まあ、いかんせん自分は男の身分だ。遅かれ早かれゆくゆくは家を出なくてはいけない存在であり、その辺は親もあまり堅苦しく考えていないらしい。

そんな吉木は現在、専門学校で毎日が充実している。

好きな事をやり、好きな事を学び、好きな者同志が集まっている。充実していないわけでもない。入学して速攻で『映画製作サークル』に入部し、そこで様々な学生作品に触れる。いい刺激だったし、吉木自身の創作意欲も沸かないわけがない。

「あ……、せ、先輩！ 藤堂先輩！！」

吉木はメッセンジャーバッグを担いで立ち上がるその人――藤堂先輩の後を追いかけるように、慌てて自らもその席を立ちあがる。それから藤堂が足を止めてくれたのに安堵したのと同時、自分の荷物を持っていなかったのに気付いてリュックサックを手にしたのだった。

「先輩！ 今から帰りですか！？」

「ああ」

「あ、お、俺も帰ります！ 一緒、いっすか！ 一緒……」

主語を言わないその言葉にも藤堂はさして表情を示す事もなく、只一つだけ頷いたのであった。笑うでもない、馬鹿にするでもない、藤堂はいつでもその顔をどこか気難しげにむすっとさせて（本人曰く怒っているわけではないとの事ではあるが）いつも孤立無援を築いている。

そんな藤堂の事が、吉木はとても好きだった。

たまたま映画好きというのが一緒だった事もその理由の一つだろうし、醸し出す雰囲気なんかにも気に入ったんだろうし、とにかくこの人の事を人間としても大好きではしなかった。いつか先輩の作る映画に、自分も何らかの形で携わることが自分の夢だ。

「そうそう！ あれから先輩の言ったおススメの映画、ほとんど観たんですよ。……地下鉄のザジと、エレファントマンと……あー、あとミツバチのささやき」

「ふうん。どうだった？」

「面白かったです」

「どの辺が？」

「……どの辺とは」

「どの映画のどの辺が面白いと感じたのか、っていうコト」

「あ、あー……」

正直なところ、エレファントマン以外はどれも自分のツボにしっかりとこなくて、『ミツバチのささやき』なんかはもう早送りしたくて仕方がなかったのが本音だ。どうも自分はこういう映像美に重きを置いたアーティスティックな作品というのが苦手なのだ。

「エレファントマンが一番好きでした」

「やっぱりな。吉木ならそう言うだろうなと思った」

「あ、そーだっ！ 俺のおすすりも見て下さいよ。先輩なら多分、ホドロフスキーとか寺山修司とか気に入る筈ですから」

「ああ、うん」

見とくよ、と適当な相槌を打たれたが最後多分この人は絶対見ない。この人に限らず人間ってそういうものだ、こっちが熱狂的に奨めても「いつかね」と言って結局すぐには見てくれない事が多い。できればすぐにその面白さを共有したいのだけど。

「けどアレだな。吉木が好きなのはやっぱりどうしても血が出るな」

「出ますねー……だって分かりやすくないですか？ ああいう話って。バカな若者がちゃらちゃらと遊びに行っ、その先で殺人鬼に遭遇！ はい、まずは犠牲者一人目！ 続いて二人目！ って感じで。で、倒したはずの殺人鬼は結局死んでませんっていう」

「一本筋すぎて俺はどうもなあ」

そう言って藤堂は小さく笑った。藤堂はどちらかと言うと、話の濃さや映像の派手さよりも詩的で抽象的な作品が好きだと言う。フェリーニの映画やキューブリックの映画が好きだと宣言したうえで長々とその魅力について語らせると、一時間は軽く消費してしまう。

吉木と藤堂はそれぞれ帰る方向が違う。こうして二人きり、一緒にいられるのは駅にたどり着くまでのほんの数分ばかりであった。だからもっと彼と話していたい時には、わざとその話題を振って長引かせる事が多い。吉木がたびたび用いる手段のうちの一つだった。

「先輩、邦画は見ないんですか？」

「邦画なんてもうとっくの昔に衰退してるよ」

「そんな事ないですよ。園子温とかキタノ映画とか、あっ、最近のだったら井口監督とかも俺は好きですけど！」

「どうしても行きつくのは『痛いシーン』に定評のある監督なんだな」

「ああいう切断シーンでは大体セロリを切る時の音が使われてるそうですよ」

「……セロリだと思えば平気か」

藤堂と話しているととにかく話が尽きない。盛り上がる。映画の趣味なんてほとんど正反対なのだが、却ってそれをネタにして話が止まらない。こんなにも一緒にいて楽しいと感じる人なんて他にはいないし、考えられない。学校のエレベーターが自分達のいる階につくと、その扉が開き中にいた学生らが次々と降りて行った。中には自分達二人だけが入り込む事となった。

「あ、先輩知ってます？ 先輩の好きなアメリってあの映画、実はアルバトロスが配給元なんですよ」

「え、そうなんだ？ アルバトロスってあの、お前が好きなB級映画いっぱい出してるどころか」

「そうですよ。意外でしょ」

へえ、と素直に驚いたように肩を竦める藤堂の顔は正直、初めて見る部類の表情をしていた。一緒にいる時間が増えていくほど、勿論色んな顔を見せてくれるようになった。

本当に、もう全てが大好きなのだ。もっと見てみたい。この人の色んな顔を。もっと聞いてみたい。この人の色んな言葉を……——一体どうしたらこの人は、自分のものになるんだろう？ エレベーターのタッチパネルを操作して、いつものように下の階へと向かうボタンを押した。

「……不思議だなあ」

「何がです？」

「俺とお前」

パーカーのポケットに両手を突っ込んで、マフラーに口元をうずめたままで藤堂がポツリと呟いた。どういう意味なのか把握しかねるよう、吉木が黙って続きを待っていると藤堂はまたポツポツと語り始めた。

「最初、お前がサークルに入ってきた頃はさ、映画の趣味も違うしなりたい役職も違うし。まあ仲良くはならないだろうな——って感じで、俺も特別な時以外は関わらないと思ってたんだけども。こうやって喋っていると、好みが一緒だろうが違おうが、まあ結局のところそんなの関係なかったんだな」

——ああ、先輩……

それはね、先輩、俺が貴方の事を特別に思っているから。

だから俺も、趣味が違おうが話を合わせる事が出来て、それに貴方は応えてくれて。でも先輩、貴方の好きなものだったら俺は頑張っって好きになれますよ。これから貴方の隣で、肩を並べて映画を鑑賞しあって、それでゆくゆくは二人で大作を撮りたいんです——……。

ニヤニヤとする顔を押しさえつけるのに必死で、吉木はいつもは「さっさと着けよこのポンコツエレベーター！」と内心で毒づく筈なのに、その時ばかりは祈る思いであった。まだ、着くな。まだ着かないでくれ。

「俺の今の彼女なんてさ、映画そのものにあんまり興味なかったし。黙って座って、最初から最後まで映画を観れない人間でさ」

「……え？」

「ああ、言わなかったっけか。俺、高城先輩と付き合ってるんだって……、ああ、まあアイツが恥ずかしいから言わないでって言うだろうから極力秘密な」

高城先輩は同じサークルの先輩で、元々は音響等を勉強していて本当はピアノ講師になりたくて音大に行きたかったのだけど、色々あって今の専門学校に落ち着いたという話のある人だった。ピアノの似合う、ふんわりとした雰囲気のある女の子の人だった。喋り方も声のトーンが小さくて、他の女子みたいにバカみたいに騒いだりもしなければ、いつも教室の端っこで本を読んでいたたり。

——あー、確かに……

考えてから何が「確かに」なのかよく分からなくなった。

「映画とかでさ、結構音がでかくなってびっくりするような演出あるじゃん。あれが心臓に悪いからって、あんまし映画は観ないんだってさ。だからたまにサークルで映画観る時あるけど、あの時だけは行きたくないって今も言ってるよ」

「へ、へーえ」

「最近では映像と音楽が綺麗なヤツだったら、一緒に観てくれるようにはなったんだけどな。でもハリウッドとか音響が派手

なのはまだお許しが出てないよ、音楽勉強してるのに音がコエってなーんか受けるよなあ」

「……」

――せ、せ、先輩。そんなの聞いてないですけど。俺、初耳ですけど？

律儀に最後まで参加していたサークルの時間を、最近高城先輩が早く帰ってた理由はそれなんですね。その後に、決まって先輩がその後に席を立つ理由も。この前のカラオケ大会の時だって何気にいつも二人で一緒にいましたよね。席も何気なく隣で。ひょっとしてテーブルの下で仲良く手とか繋いでたんでしょうかね、あ、いやらしいなあそれ。

「まあ、趣味の相違もそれはそれで楽しめばいいって、お前を通してよく分かったからさ。これからもアイツとは好きなものも嫌いなものも分かち合って行けたらなあ、って」

――ひ、人をダシにして自分の恋愛盛り上げてんじゃねえぞこのド腐れどもがああああッッ！！

ものすごく、ものすごおく、自分の中で何かが爆ぜようとしたのだが吉木はグッとそれを噛みしめつつ堪えてそれから反射的にニコッと笑ってしまった。駄目だ、惚れた弱みというアレか。悔しいのと惨めなのでもう泣きたいし同時に怒りたくもあるのだけど、流石にそこまで気は狂っていない。

ここで突然、感情を露わになどしようものならそれこそ告白する前に嫌われてしまうようなものだろう。――落ち着け。落ち着くんだ。

「そうですか、先輩が喜んでくださるんなら、俺はもう幸いですよ」

「……お前、泣かせるような事言うなよ」

そう言ってこれまでに挿んだ事のないような、年齢相応の、と言えばいいのか――照れ臭いような人間味あふれる笑顔を浮かべた先輩を見て、吉木は間違いなく今自分の顔は凍り付いているんだろうと自覚した。

――何て事でしょうか……これは酷いですよ……侮辱罪に値しますよ……

藤堂というそれまで一匹狼を貫いてきた筈の彼が、日に日に人間らしくなっていったのは何てことない。自分のお陰ではなく、違う存在がすぐ傍にあったからなんだ……雷にでも打たれたようなショックが、吉木の全身を駆け巡った。

「……、あれ？」

「？」

エレベーターの扉の前で、藤堂が小首を傾げた。

「おかしいな、故障？」

一階に到着した筈なのに開く事のない扉の前で、藤堂はもう一度首を傾げてから扉に手をやった。

――あっ！

その途端、何かに閃いたように吉木は藤堂を押しよけると扉の前に両手を広げて立ち塞がったのであった。

「や、やばいですよ。先輩。これ絶対、外に出ない方がいいパターンです！」

「ハァ？」

口早に捲し立てながら、吉木は藤堂を押し戻して更に叫んだ。

「多分、今外の世界は終末ですよ！」

勢いで思わず尻餅を突いてしまった藤堂だったが、吉木の鬼気迫る表情にそんな事はもはやどうでもいいといった具合だった。

「な、何が？」

「だから……、えっと……ゾンビです」

「？」

「ロメロの世界がマジモンになったんですよ、今外に出たらうじゃうじゃとゾンビが動き回ってるに違いないです！」

言いながら吉木は思い立ったようにズボンのケツポケットに突っこんであったスマホを抜き出した。丁度、昨日の夜に途中で読むのをやめたままのスマホ小説の画面を開いた。内容はてんで二流、三流なもので、東京の街に大量のゾンビが発生してしまう内容だ。その途中、あたかもリアルタイムでそんな出来事が起こっているかのように掲示板風に切迫した状況を伝えるような場面があったのだ。

その画面を見せつけると、藤堂は訝りながらそのスマホに目を通し始めた。じっくりと読み込まれる前にそれを再び取り上げて、まだ理解しきれない藤堂に向かって吠えた。

「昨日から何かT w i t t e rとか騒がしいなって思ってたんですけど、きっとマジなんですよ。誰かがネクロノミコンを読んだんですって。今、絶対外に出るとサングやウォーカー、それに未知の怪物達がうじゃうじゃいますよ」

「……どけ、吉木。緊急用のボタン押すから」

半分呆れたような顔つきで、藤堂はそんな吉木を無理やりに押しのけた。それでパネルに付いた緊急連絡用のボタンを押したが、何の反応も得られない。

「あれ？」

若干苛立ち交じりに、藤堂は何度もそのボタンを押してみるが応答はなかった。本当ならば絶望すべき場面に直面したというのに吉木は内心で笑い転げたい気持ちでいっぱいになった。――どこかで小耳に挟んだ事がある。すぐにメンテナンス用のコールセンターに繋がるパターンのボタンと、この建物の内部にいる人間と繋がるパターンのボタンがあると。

つまりこのボタンはきっと後者のタイプで、運のいい事に事務所の人間がこの呼び出しに気付いていないんだろう。全く酷い事務の連中だと日頃から思っていたが、今日に限っては感謝したい気持ちでいっぱいだ――運が、幸運の女神が、俺に今味方し始めた！

「クッソ！……どうなってんだ」

「回線もいかれてるんですね」

冷静に呟くと、藤堂がやや蒼白気味な顔をさせつつ振り返ったのであった。

「さっきの画面、もう一回見せてくれよ」

「えっ……。あ、あ～……すみません、電源切れちゃって」



電源を切っておくのをしっかり忘れずに、真っ暗になった画面を見せておいて藤堂はしょうがなしに自分のスマホに手を伸ばした。残念ながら電波がなく、藤堂は不機嫌そうにそれをもう一度しまったのだった。

「信じたくはないけど……吉木、さっきの話は本当なのか？ そのゾンビだの怪物だの云々って」

「エ……、あ、ああ……ハイ。お、俺も昨日はバカにしてたんですけどこうなってしまったからには本当なんじゃないのかな、と。ですからしばらく外には出ない方が安全だと思います。こういう時、ハコの外に飛び出すのは一番危険だって言いますしね」

「……」

それから、藤堂はがっくりと項垂れるようにしながら壁に背中を預けながらずるずると床に崩れ落ちた。吉木の隣で、藤堂は膝を抱えるようにして頭を伏せた。

「——ついてねえな、昨日から」

「え？」

「いや、何でも」

消え入りそうな程に小さな声で呟いて、藤堂は少し心細そうな顔で吉木を見つめた。

——あ、この顔も初めてかも……

こんな時に何だけど、やはり吉木の胸は高鳴っていた。ちょっとだけ泣きそうにしている藤堂の顔は、いつものどこか一匹狼然とした人を寄せ付けない気高さをぶっ壊してすっかり庇護欲を掻きたてる少年の顔をしていた。

(……ああ先輩、可愛い……)

女性の言う「母性本能がくすぐられるような」とはこういう事を言うのだろうか、なんて思いつつ隣で座り込む藤堂と視線を合わせた。

——ああ、これで男と女ならなあ。いいシチュエーションなんだけど。一気に進展するパターンの筈なのに……でも男と男で、しかも既に相手持ちだしなあ……

どうすべきかウンウンと責めあぐねていると、藤堂がまたポツリと言葉を漏らした。

「アイツ、今きっと家で一人にいる」

「……高城先輩ですか？ そういえば、今日は姿見ませんでしたね。休みなんですかね？」

「ああ、一昨日くらいから風邪気味らしくてずっと家にいるよ」

それから藤堂は抱えていた膝を解放し、その場に脚を伸ばす格好になった。

「でも、これで良かったのかもしれないな」

「？」

何か一人で納得するように言い、藤堂は首を横に振った。息を吐いた。

「実は昨日、アイツと喧嘩したから」

「えっ！」

「ちょっと口論になってさ、それっきり会話してない……こんな形で終わっちゃうくらいなら、いっそもう会えない方が楽かな、って……」

——何だよそれ、やっぱり幸運が今、俺に味方してるんだな！？

これは思ってもみない好機の訪れである、吉木はガッツポーズしてやりたいのを何とか追いやってそれからシリアス味を帯びた表情を取る事を忘れず藤堂のその手を取った。しっかり握りしめた。

「……先輩。駄目ですよ、そんな発言。先輩らしくないじゃないですか」

「——吉木……」

「そんな事言わずに、ここを出られたら必ず一緒に高城先輩のところに行きましょう？ ね？」

「……」

——っしゃああああ！ 決まったああああ！

もう、自分自身に拍手を送ってやりたい気持ちでいっぱいになってしまった。わざとらしすぎず、重すぎず、極々自然体で。その笑顔に絆されたよう、藤堂が泣き笑いのような表情になって肩を竦めた。

「お前って本当……、いや、ありがとうな」

「とんでもないです」

これが男女であったならすぐにでも結ばれるんだろうけどなあ、そうはいかないから難しいところだ——と、吉木はつくづく考えたがそれもそれで面白いかな～と思った。

性別という概念を覆して引っ付いたとしたら、それこそ簡単には別れる事のない真実の愛に辿り着けるに違いない——次、課題で映画を撮るとしたら同性愛を真剣に扱った題材ってのもいいかもな……。

「あの、先輩。つかぬ事を聞くんですけども」

「ん？」

「その……答えたくなかったらいいんで、何で高城先輩と喧嘩を？」

興味本位と、ライバルとなるのであろう相手へのリサーチという事で探りを入れてみると藤堂はちょっとだけ顔をしかめて視線を外した。

——あ、やっぱ言いたくない？

そんな雰囲気を感じたように、吉木が「やっぱり話さなくていいですよ」と声掛けをしようとした時だった。思い切ったような、藤堂の真っ直ぐな視線とぶつかったのは。

「お前になら話すよ——、もう、こんな事態だしな」

「？」

「昨日さ、寝込んでるって聞いたから心配になって高城先輩の部屋に尋ねていったんだよ。セジュールカトレアっていうところから大体ニキロ先のマンション、二〇六号室」

「え、ええ」

「せっかく見舞いに行ってあげたのに、あいつの態度が酷くてさ」

「は、はあ」

「玄関の扉を開けもしなくてな。……扉を叩いて大声で叫んだらさ、中から返ってきたのは酷い言葉だったんだよ」  
「どんな……？」

藤堂はその時の状況を思い起こしているのか、どこか忌々しげな顔つきになって親指の爪をギリギリと噛んでいる。

「『私はアンタと付き合った覚えなんてないし、二度と来ないで』……だってさ」

「へえ～、それは酷……え？」

「おまけに、違う男の声までしてきたよ。俺に向かって勘違い男！ 次来たら殺してやる！ だってよ」

「……え??」

藤堂が一息吐いたようにふうっとそこで息継ぎをする。

「――あの、先輩。高城先輩と藤堂先輩が付き合ったキッカケというか、なれそめってなんですか……？」

「キッカケ？ そんなの、高城先輩が俺に話しかけてきたからさ。俺と話す時だけ明らかに他の奴との態度も違ってたしそれにしょっちゅう目が合うんだ。これはもう付き合っていたといっても過言じゃないだろ？」

――え???

今度の「え？」は声には出なかったが、表情は大いに不審がるようなものであっただろう。顔全体でもはや藤堂という人間を疑うように、吉木は本能的に何かを察知している自分に気が付いた。

「先輩。それっていわゆるストー」

「ストーカーじゃねーよ！……で、まあ、話戻すな。俺さあ、ムカついて。だって浮気だろ、それって。一回家に帰って、工具用の地電動ノコギリ持ってきてさ。うん、あれな、チェーンソーだ。お前の大好きな」

「……あ、は、ええ」

「それで、扉にかかったチェーンをぶちぎってやって、部屋に入り込んだわけだよ。ムカついたからな。中には二人がいて、高城先輩は全く寝込んでいる気配もなかったな。浮気相手をいちゃつくための嘘だったわけだよ、風邪っていうのはさ」

どうしよう。追いつかない。脳内CPUの処理速度が、先輩の話を理解しきれしていない。

「それで――まあ、謝りもせずに警察呼ぶとか叫ぶものだからさ。……まずは邪魔な男の方をチェーンソーで無力化しておいて、そこで刃こぼれして使い物にならなくなったからさ、次はもういっちょ持参していた文化包丁で逃げ惑うピッチの方をスパーン！ っと。馬乗りになって一気に首をスパーーンッ！ っと」

「……、それ、嘘ですよ？ 次に作る映画のシナリオですよ？」

「嘘なもんかよ、ホラ」

そう言って藤堂は前開きパーカーのジッパーを下げ、その下に着ていたシャツを見せた。落書きみたいな猫の絵が入ったそのシャツには、ほとんど茶色に変色した血がベツトリと滲んでいた。

「ち、血糊ですよねぇ？」

「本物だってば」

次にバッグから取り出したのは、その時に使ったんだと思われる抜き身のまんまの文化包丁だ。切れ味の悪そうなその刃には、高城先輩のものと思われる茶色っぽい血液がやはり付着している。

何だか異臭までできて、この手のバッチイ映画を見慣れているはずの吉木でもえげすみそうになった。やっぱり本物は

違う、臭いまであるんだからそりゃそうかーって、感心している場合じゃあない。

「……でももういいや……、世界がそんな状況だってんなら、俺のやった事も正当化される。ゾンビに襲われたから殺したんだって言えば正当防衛になるだろ？」

「ひ、人殺しいいッ！！」

思わず絶叫し、吉木は後ずさりながら藤堂と距離を置いた。立ち上がり、背後の緊急連絡用ボタンへ指先を伸ばした。もう夢中で押しまくった、高橋名人も驚きの十六連射、いやそれ以上の速さだったろう。

「——人殺し？　なんで」

藤堂は心底不思議そうに首を傾げた。

「キ○ガイ！　キ○ガイ！　キ○ガイ！　見損なった、変態野郎！！　アンタのやったのは立派な殺人罪だよ！　おまけにストーカー罪と脅迫罪も上乘せされてもう駄目だよお！」

「ハァ？　何言ってるんだよ。どうせゾンビになるんだろ、なら殺したところで問題ないじゃないか……」

「……ごごごっ、ごめ、ごめんなさい先輩、嘘です。ゾンビなんて嘘なんです。でたらめなんです。俺、先輩の事尊敬しててめちゃくちゃ好きで、だから少しでも一緒にいたくて、そういう出まかせを口走ったんですけど、もう無理っす。もう先輩の事好きとか嫌いとか以前の問題になりました、あああああ～……！」

「——何だよソレ……」

傍目から見ればきっと気が狂ってしまっているように見えるのは自分の方で、吉木はそれでも構わず緊急用ボタンを連打しまくった。

「おい、何だよそれ」

『もしもし？　学務ですがエレベーターに何か不具合でしょうか？』

「た、助けて！　殺人鬼と閉じ込められたんだ！　お願い、早くしてえ～！」

もうすっかり気を取り乱してしまい、千切れんばかりの声で叫ぶとすぐそこにいる包丁を持った先輩と目が合った。鬼に金棒、キ○ガイに刃物、すっかりキじるしの人と化してしまった先輩の姿がそこにはあった。

「俺を騙したのか」

「違う！　騙すとかそういうつもりじゃなくて、ほんとに先輩の事好きだったけど、でももう無理だ。無理なんだ！」

「……吉木まで俺を裏切る気なんだな」

何という事なんだ。

ほんの些細な嘘だったのに。いつしかその嘘は「真実」になった。怪物は本当に実在した、いや、作り出してしまったんだ——悲鳴と、何かの衝撃音が鼓膜を劈いて脳味噌を震わせた。

次に目を覚ます時、もう自分はこの世には存在していないのかもしれないなと思った。

「エレベーターの故障ですか、定期点検はしてる筈なんですけどこういう事もあるんですねえ〜」

「そういうのはいいですからさっさと開けて下さいよ、イタズラにしても気味が悪くて……」

「はいはい、今開けますからね……っと」

やってきたのは学務の職員数名と、やってきた点検スタッフが一名。気の抜けるようなやり取りの後、これまた随分と簡単な作業と一手間だけでその固く閉ざされた扉があっさり開いてしまった。

全員の頭に「これ、わざわざ高い金支払って作業員呼ばなくても自分達で開けられたんじゃないかねーの？」という複雑な思いが浮かび、微妙な空気が流れた頃、エレベーターの扉からはむっと強い独特の香りが漂ってきた。

「……？」

訝るように覗き込むと、まずは作業員のスタッフが腰を抜かして絶叫した。その背後から女性の職員が中を見る頃には、扉が完全に開き切って中の全貌が拝めるようになっていた。

「ヒッ……」

エレベーターの内部を血に染めて。

吉木は一人、大好きだった先輩の首を抱きしめながら鼻歌を口ずさんでいた。

「……先輩、ごめんなさい。ごめんなさい。俺、先輩の事だったら何でも理解するって自分に誓ったばかりなのに拒むような真似して……」

「ひ、ひいいい！」

「ゲロ吐いてないで早く警察呼んでェ！」

最後の最後で、無事生き残ったはいいいけど頭がおかしくなっちゃうのもホラー映画のお約束なんだよなぁと吉木は考えた――まっ、俺はぜんっぜんおかしくなんかないけどね！ 断末魔の恐怖をその顔に刻み込んだままの藤堂の顔を見つめ、「あ、また初めて見る表情だ」なんて嬉しくもなったりした。

――先輩、愛してますよ……

ぼく<sup>ど</sup>の<sup>ど</sup>し<sup>ど</sup>ょう<sup>ど</sup>来<sup>ど</sup>の<sup>ど</sup>夢<sup>ど</sup>は<sup>ど</sup>ト<sup>ど</sup>レ<sup>ど</sup>  
ト<sup>ど</sup>レ<sup>ど</sup>ジ<sup>ど</sup>ャ<sup>ど</sup>ー<sup>ど</sup>ハ<sup>ど</sup>ン<sup>ど</sup>ダ<sup>ど</sup>ー<sup>ど</sup>と<sup>ど</sup>い<sup>ど</sup>う<sup>ど</sup>  
う<sup>ど</sup>で<sup>ど</sup>は<sup>ど</sup>あ<sup>ど</sup>り<sup>ど</sup>ま<sup>ど</sup>せ<sup>ど</sup>ん<sup>ど</sup>。  
ぼく<sup>ど</sup>が<sup>ど</sup>ト<sup>ど</sup>レ<sup>ど</sup>ジ<sup>ど</sup>ャ<sup>ど</sup>ー<sup>ど</sup>  
の<sup>ど</sup>吉<sup>ど</sup>お<sup>ど</sup>か<sup>ど</sup>く<sup>ど</sup>ん<sup>ど</sup>と<sup>ど</sup>、<sup>ど</sup>た<sup>ど</sup>  
く<sup>ど</sup>ん<sup>ど</sup>と<sup>ど</sup>大<sup>ど</sup>さ<sup>ど</sup>あ<sup>ど</sup>く<sup>ど</sup>ん<sup>ど</sup>と<sup>ど</sup>  
に<sup>ど</sup>出<sup>ど</sup>て<sup>ど</sup>く<sup>ど</sup>る<sup>ど</sup>キ<sup>ど</sup>ャ<sup>ど</sup>ラ<sup>ど</sup>ク<sup>ど</sup>  
い<sup>ど</sup>い<sup>ど</sup>か<sup>ど</sup>ら<sup>ど</sup>で<sup>ど</sup>す<sup>ど</sup>。  
で<sup>ど</sup>ぜ<sup>ど</sup>っ<sup>ど</sup>た<sup>ど</sup>い<sup>ど</sup>に<sup>ど</sup>世<sup>ど</sup>界<sup>ど</sup>を<sup>ど</sup>  
ち<sup>ど</sup>か<sup>ど</sup>い<sup>ど</sup>ま<sup>ど</sup>し<sup>ど</sup>た<sup>ど</sup>。  
し<sup>ど</sup>の<sup>ど</sup>や<sup>ど</sup>く<sup>ど</sup>そ<sup>ど</sup>く<sup>ど</sup>は<sup>ど</sup>ぜ<sup>ど</sup>っ



**崩壊**  
崩壊 (くずれ)

ぼく<sup>ど</sup>た<sup>ど</sup>ら<sup>ど</sup>か<sup>ど</sup>ら<sup>ど</sup>す<sup>ど</sup>た<sup>ど</sup>お<sup>ど</sup>ん<sup>ど</sup>ご<sup>ど</sup>  
ぜ<sup>ど</sup>っ<sup>ど</sup>対<sup>ど</sup>に<sup>ど</sup>仲<sup>ど</sup>の<sup>ど</sup>い<sup>ど</sup>い<sup>ど</sup>ま<sup>ど</sup>ま<sup>ど</sup>の<sup>ど</sup>友<sup>ど</sup>

小学校の時、クラスの奴らと大ハマリしたとある有名大作RPGゲームがある。当時はスーパーファミコンが主流で、ソフトと言えばカセットの時代だったのだけど新品で買うとどれも一個で一万円近くしていた記憶がある……と、まあそんな話はどうでもいいか。

それで、そのゲームをクラスの奴らと誰が一番早くクリア出来るか競い合っていた事やゲームに出てくるキャラクターに非常にはまり込んでしまい大きく影響を受けた事を現在、三十路を前にしてよく思い出す。

そのキャラクターは『トレジャーハンター』という職業で、宝箱の鍵を開けたりモンスターからアイテムを盗んだり、まあゲームには欠かせない存在というところか。おまけに複数いる女性キャラクターから好意を持たれるし、当時は羨ましいなあなんて思っていた。今見ると「単なる女タラシじゃん」という印象を持つのかもしれないが——と、昔のように純粋な気持ちで何でも見られない自分の汚れた心を叱りつつ、それが大人になるという事なんだろうなあと無暗に納得させてみる。

今年二十九歳になった小泉は、そういえば実家に置いてきたゲーム類は今どうなっているんだろうなあと考えた。ホコリ被って押し入れの奥にしまわれているのかな、とか。洗濯物も溜まってきたし、週末は実家に帰るとしようか（ちなみにこの話を会社の女性社員にすると、いい年こいて洗濯も自分でしないのかと大いにドン引きされた）。

「最近っつーか社会人になってからゲームってとんとしなくなったよなあ。時間もなけりゃ昔みたいに楽しむことが出来なくなったっつーかー……」

最近の口癖は『時間がない』、である。とにかく本当に時間がない。なさすぎる。最近まで半袖で活動していたのに、気付けばもう冬の気配が近づいてきているし。

「どうして寝たら明日が来ちゃうんだろうなあ、ほんと……一日二十四時間って短すぎるよお。働いて帰ってきて、飯の準備して風呂入ったらもうほとんどその日は終わりじゃん……」

今の会社に営業職として勤めてもう五年以上は経過しているのだが、一向に仕事には慣れない。仕事量がとにかく多すぎて、休日も出社しなくちゃ溜まった仕事の消化が出来ないわけだけど「休日は来るな」と上司から釘を刺された為にそれも出来なくなってしまい、また仕事が山積み。負のループ。

「だったらどうしろってんだよお、無理に決まってんだろうがハゲ」

とにかく時短しろ時短、とチクチク言われるもとにかくもう少し効率を良くする事をしてくれなければそんなのできっこない現状。

「もっと人数雇ってさあ、分担すりゃあーいんだよ分担……ういっく」

もうすっかりへべれけになった小泉であるが、晩御飯をどこかで食べて帰ろうと思いつらと立ち寄った居酒屋でつい一杯、いや二杯、いやいやもっともっと引っ掛けてしまったわけである。飲まなくちゃやっつけられない時だってあるのだよ、大人ってのは——と、駅のホームで電車を待ちながらベンチに腰掛けて、自販機で温かいコーヒーを買う。

「……俺にあったかいのは自販機だけだよクソ」

さっきからブツブツと独りででかい声で文句を垂れているが、小泉本人は気にならなかった。それくらいに酔っぱらっているわけなのだが、傍から見れば単なる迷惑な人でしかない。道行く人皆、明らかに彼の近くに寄りつこうとはせずに大袈裟なくらいにまで避けて通ってゆくのであった。

手にしたブラックの缶コーヒーをもう一度だけ飲み、それから小泉は何やらぶつくさと思痴を吐きながらがっくりと項垂れた。そんな彼の横を女子高生二人組が通り過ぎたので、反射的についつい目で追ってしまう。

――スカート短えなー、寒くないのかなあ……

と、まあ何だか中年臭い事を考えつつイヤらしい気持ちは抜きにして――というのはまあちょっと嘘で半分は下心ありきで見つめていたら、それを俊敏に察知されてしまったらしい。女子高生二人は不快感を露わに、こちらを振り返りつつひそひそ話をしている。

「やだ、あのオッサンこっち見てない？」

「キモッ、早く行こー！」

まあ、キモかったのは本当だろうけどまだ二十九歳のお兄さんにオッサンってのはちょっと酷いんじゃないのかな？ と小泉は反論したい気持ちでいっぱいになってしまった。君達、俺はまだ二十九歳なんだよ！ っていう風な具合に。

「……いやオッサンか……、そう見えちゃうかー……」

思い起こせば自分もあの年代くらいの頃は、二十五歳以上はもうおじさん・おばさんだと思っていた気がする。そして気付けば自分がその年代に突入してきたもんだ、散々バカにしたツケが今になって巡ってきたような気がする……ああ、あの時馬鹿にしていたアラサー世代の皆様すみません。今では俺が立派なオッサンでした……。

「んっだよちくしょ〜め〜……、俺だってなあ別に年取りたいわけじゃねえし……ひっく」

そろそろ駅員さんに注意でもされるんじゃないだろうか、というレベルで独り言の音量が大きくなり始めた頃だ。ようやく電車が到着し、小泉はフラフラと千鳥足で開かれた扉の向こうへと進んでゆく。

見れば車内はがら〜んと静まり返っており、無人でいわば貸し切り状態。それならば、と小泉は酔っ払い特有の遠慮の無さで椅子の上にどかっと腰かけた。車内の暖房がいい感じに温かくて、外気によって体温の奪い取られた身体に心地良く浸透する。

――駄目だ、気持ちいい……

はあっ、とオッサン臭くて酒臭い息を吐いて小泉はいけないと思いつつもついうとうとし始めてしまうのだった。電車が動き出したら今度は揺れが快適なもんで、これまた眠気を誘う。

――あ〜、このまま眠りたい。歩いて家に帰るの面倒くせえなあ。で、家に着いたらこの酒臭い身体を何とかしないと……風呂……は、沸かすの面倒くさいしシャワーにして歯磨きと洗顔もそこで済ませて、髪はもう今日は乾かさずに寝よう。そうしよう……

何てダメ人間な思考回路だろう、と思いつつ辛いものは辛いんだししょうがない。所詮は社会の歯車には逆らえない、平凡な一市民なのさ。トレジャーハンターにはなれなかった、単なる悲しい社畜なんだ……。

「……」

どのくらいそうして電車で揺られていただろう。無人の車内に、少しずつだけ人が乗ってくるのが分かった。気付くと子どもの声が溢れ返っていて、ああ、子どもの遠足でもあるのかな？ と、思った。普通なら何でこんな夜に子どもが、ま



してや遠足なんか全くどうやったらそんな事が考え付くのかと思うがアルコールにまみれた脳味噌ではそこまで考えが至らなかつたらしい。

よもや時刻は深夜の二十三時を回ろうとしているにも関わらず、電車の中は子どもたちのあどけない声で溢れている事に何故、一つも疑問を持たないのか。いやはや酒の勢いとは恐ろしい――。

「.....うわぁあぁっ!？」

子どもの笑い声がすぐ耳元で聞こえたような気がして、思わず電車の中で叫びながら飛び起きてしまった。実に間抜けな醜態を晒してしまったが、幸いな事に周囲には誰もいなかった――誰もいない??

そんな馬鹿な、と初めて疑うという気持ちを持って辺りを見渡したがやはりそこには誰もおらず、先程まで聞こえていた子ども達の声なども全く聞こえなかった。

「夢、か.....?」

それにしても何て傍迷惑な野郎だ、自分ときたら.....酒に酔って泥酔して、拳句の果ては奇声を上げて。誰もいなかったのは本当に救いだ、と小泉は口元を拭ってみた。アホ面を見せただけではなく、これでヨダレまで垂らしてたら最悪だと思ったが幸いにもそれは無いようだったので安心した。

――何だか酔いも一気に引いちゃったなあ。これ以上、馬鹿な真似やる前にさっさと帰って眠るか.....

まだ冷蔵庫に栄養ドリンクあったっけなあ、と考えながら椅子から立ち上がり、ふらふらと電車を後にする。頭痛のする思いで駅に出たら、やはり静まり返ったように誰もいない。

「何だよ、もうそんな時間かぁ?」

腕時計を見ようとして足元へ視線を落とすと、視界にまず飛び込んできたのは白いチョークか何かで描かれた一面の落書きだった。

「.....ええ!？」

思わずぎょっとして見渡してみると、自販機やベンチにまでそれは及んでいるらしい。酷い有様だ、落書きと言ってもアーケードやらで見るとようなスプレーで若者達がいそしむ様なああいう類のものとは違う。本当に、小さなまだ小学生に行くか行かないかくらいの幼児がイタズラ心で描いたような代物だった。

「な.....、何じゃこりゃあ」

ちょっとした落書きくらいならばこんなに驚きもしないだろうけど、とにかく駅のホーム中の至る所が埋め尽くされているのだ。それも結構時間の経過したようなものもあり、ここ数日の事ではなさそうだから驚くなというのが無理な話だと思う。

「何だ? まだ酔っぱらってんのか?」

駄目だ、頭を冷やそう――とその絵の具でも飛び散らせたような色とりどりの跡が残る自販機に近づいてみる。こういう時は冷たい水かお茶か、はたまた苦いコーヒーだ、とそのラインナップを見れば果実ジュース類に温かいココア、コーンスープ、炭酸系の甘いドリンクにいちご牛乳だとかバナナオレだとか――まあものの見事に飲みたいものがない。

「何だよこの偏った種類は、俺ならもっとバランスよく入れるつつうんだよ！ ガキの好きそうなもんばっかじゃねえか……」

チッとこれ見よがしに舌打ちを一つさせて、小泉はとりあえず歩き出す事に決めた。どうも降りる駅を寝ぼけて間違えてしまったらしい、ひとまずはここを出てタクシーでも拾って帰る事にしよう。

プラットホームの階段を降りるも、やはり不気味なくらいに誰もいない。改札口は無人で、駅員らしき人の姿は見当たらない。全体を見渡せば何だか廃墟も同然なくらいに静まり返っていて、というか自分以外の人間がいないのだ。

照明もほとんど消えかかっている、チカチカと駅の中を中途半端な光で照らしている。現在取り壊し作業中であるかのようなその駅の中、工事用具が乱雑に積まれたままにされ（というよりは置き去りにされてしまっているようだ）立ち入り禁止用の三角コーンが劣化してひしゃげている……天井は崩落し外気が洩れつつあったし、乗換案内表にもクレヨンで描かれたような落書きが走っていてまるで意味のなさないものと化していた。

「な、何だコレ……、ま、間違えたってレベルじゃねえぞ……。俺、絶対に酔ってるよね？——そ、そうだな！ そうに違いない、絶対にそうなんだ。ようし、だったらひとまず体内に居座るアルコールを全部出してしまわなくちゃな。うん。そうだ、それがいいよ！ あ～、トイレトイレ……」

駅の中にはドブ川のような汚水臭に混ざり、時々甘ったるいお菓子のような匂いが漂っていた。綿菓子みたいな、砂糖を炙った時のような歯が痛みそうな強烈に甘い香りが。まあ、いい匂いと嫌な匂いが混ざったところで悪臭にしかならないのだが。

「便所便所便所……べん、じょ」

やはり真っ暗なその男子トイレの中で、何かガラスの割れるような音が響いた。思わず足を止めて、そっと内部を覗き込んでみた。

「……！？」

暗くではっきりとは見えなかったが、誰かそこにいるらしい。声をかけようとしたが、その人物の姿を確かめるでもなく異様な雰囲気が出てきたのでまずはそれを止めた。出かかった言葉を飲み込み、小泉は覗き込むようにしてその人物達が何者なのか様子を窺い見る事にした。

見ればその人物は三人ほどおり、こちらに背を向けて円陣を組むようにトイレの隅っこにいる。三人ともどれも背格好は低く、子どもだという事が分かった——子ども？ 何故か不意にぞくとして、小泉は悪寒が走るのを覚えたのだった。とにかく、その子ども達が一体何をしているのかと思い息を詰まらせていると三人とも顔にお面を付けているのが分かった。

驚いて、思わず悲鳴を漏らしかけたが何とか耐えてみせた。

それぞれ狐面、ひょっとこ面、お多福面をはめており暗闇に浮かび上がるその姿と言ったらまるで不気味としか言いようがない。

——な、何なんだよ一体……

固唾を飲んで見つめていると、彼らのうちの一人が何やら足元を指して、それを合図にしたように他の二人が足元で地団太を踏みだした——と思ったのだが、そうじゃなかった。彼らの囲むその包囲の中、中央に何やら薄茶色い頭陀袋に包まれ

たモノが置かれている。三人はそれを何やら踏んづけているようなのだ。

「……？」

当然何を踏んでいるのか気になり凝視してみたら、その袋にうっすら何かが滲んでいるのに気が付いた。あ、と思って間もなくそれはうっすらどころかどどん色濃くなってゆき、袋の全体に広がり生々しい染みとなって浮かび上がっていた。

——間違いない、血だ……！

あの中に何が入っているのかなんか知らないし考えたくもないが、とにかくここにいるのは危ない。ここは異常なんだ、という事を脳が理解して後ずさった。

「み、見てない。俺は何も見えてないぞ……あれは嘘だ、現実のものじゃない、これはきっと夢だ……」

片手で頬を引っぱたいたりつねったりしながら一步一步後退してゆき、するとすぐ背後にあったドラム缶を思い切り蹴飛ばしてしまった。ゴロンッと勢い良く転がる横転したドラム缶の中には、よく知る駄菓子の袋や缶ジュースの空なんかがドサドサッと飛び出してきた。

「あああ！ お約束……ッ」

慌てて顔を上げると、当然その物音に彼らも気付いたのだろう。

「誰だ！」

「……侵入者か？」

「分からない、大人だったら殺すしかないよ」

声変わりのしていないあどけない声が、今とても物騒な事を言った。

——お、大人だったら殺すって今……！

釈然としないが考えている暇すら惜しいだろう、あんな年端もいかないチビッコ軍団から尻尾巻いて逃げるなんてとんだ笑い話だが、きっと誰であってもこうなる筈だってば。そりゃあ、自分が何か格闘技の達人や免許皆伝クラスならば挑んだりもしただろうがこんな異質な状況では恐ろしいだけだ。

小泉はとにかく全力で走り、全力のつもりなんだけど思ったよりスピードの出ない自分の身体に嫌でも年齢というものを感じてしまう。慌てて駅を脱出し、外の世界へと転げるようにして飛び出したのだった。

「くっそー！ くっそがああ～！ 一体どこだここはぁチクショウめ……」

はらわたの底から込み上げてくる言いようのない戦慄に、全身が疼く。こんな恐怖、喚いていないとどうにかなりそうできるとにかくまあ叫びつつ顔を上げてみるとやはり見覚えのない景色ばかりが夜の世界と共にそこにはあった。不自然なくらいに大きな白銀の月の下、広がるのは廃墟のような建物が連なる世界だった。

見渡す限りそこは団地のように建築物が連結して立ち並んでいて、長屋建ての建造物が狭い路地を挟みつつ敷き詰められている。昔に呑みに行った事のある、新宿ゴールデン街をどことなく思い出させる風景だ。ところどころ、脈絡なく掲げられた看板は全て平仮名若しくはカタカナばかりで、時折簡単な漢字が混ざるだけで一言で表せば『異様』でしかない。

おかしいのは街並みだけではない。

電柱が無数に立ち並び、そのどれも高さが不規則にバラバラであった。高さだけではなく、真っ直ぐに伸びたものもあれば斜めに傾いたもの、電線が垂れたままのもの、とにかくこんなものは目にした事がなかった。おもちゃ箱をひっくり返したかのような、ごちゃごちゃしたその街を小泉は駆け抜けた。とにかく殺すなんて宣告された以上、逃げるしかない。

「うう……ッ！ 酔っぱらってるっていうか寝ぼけてるのかな、俺え……っ」

「いた、あいつだ！」

「やっぱり大人だぞ、あいつ殺そう！」

「う、うあああ〜っ……夢じゃねええ……ッ」

立ち止まっている暇なんてなさそうだ。小泉は横手に逸れると、狭いその建物と建物の隙間に滑り込んだ。若干腹がつかえかけたが、まあともかく。

何とかかんとかして潜り込み、下水臭いその通路を通り抜けてみればようやく開けた場所へと飛び出した。が、これまた乱雑に散らかった場所で、スクラップ置き場のようであった。山積み不法投棄されたかのようなゴミの山はやはり不規則なものが捨てられているようで、学校で使うような机と椅子があったり、潰れた車が重ねてあったり、何故か大量のマネキン人形が積まれていたり、錆びた標識が何本も突き刺さっていた。

「……これは……？」

導かれるようにその場所を歩けば、ブウウ————ンンン————ンンン……………と、奇妙な音が鳴り響いていた。遠くの方には鉄塔のようなものが見えたが果たしてそれが何の意味で建っているものなのかよく分からない。

ずるずると引きずるような足取りで歩いていると、足元のゴミを蹴り飛ばしてしまったらしい。あ、と足元を見ると何か石ころのようなものだ。何の気はなしにそれを見つめていると、それがどうも単なる石ころではなくて何か石像のような形をしているのに気が付いた。手に取ってみてみると、どうもお地藏さんの首のようである。不気味になりそれをもう一度置くと、すぐ傍に大量のお地藏様が立ち並んでいた。

その手前には風車が何本も突き刺さり生温い夜風に回っている——花束やらぼろぼろのぬいぐるみ、そして何故かたくさんのコケシ……がお供えしてあるようだった。あとは駄菓子と缶ジュース等の食品類は誰かによって手をつけられているようで、その周辺をブンブンと羽虫がしつこく飛び回った。

「……ホントまじで何なんだ……、エマージェンシーだぜ……」

久しぶりの全力疾走のせいで横っ腹がズキズキ痛んだが構っているのも惜しいくらいだ、今の状況は。小泉がせめて何か身を守るような武器がないかと思い、辺りを見渡した時だった。

「お兄さん」

「ヒッ！！」

「……後ろ、後ろ見て」

声変わりのしていないあどけないその声は、恐らく今自分の命を狙う存在からの呼び声だろうと思う。そんな手にかかるものかと身を翻したら、続けざま足首を掴まれた。

「僕を信じてよ、お願い！」

「だ、誰が信じるかよバカやろう！ は、離せコラァ」

「いいからとにかくこっちに隠れて、あいつらすぐ追いついてくるよ」

地下室にでも繋がっているのであろうその扉、地面からこちらを窺う小さな影。こいつを信じていいものかどうか、しかし周囲に集まってくるその殺気だらけの気配よりも数段マシに思えた。遠くでお昼のサイレンのような音がけたたましく唸り声を上げ、夜の空に響き渡った。騒音なんてレベルではない、街全体がイカれてるとしか思えない。

「ええい！ クソ！」

小泉は腹をくくったようにその声に従った。

梯子を降りると、そこにいたのは少年一人だけのようである。狐面をつけた少年は小泉が降りきるのを見届けると、手際よく梯子を片づけ始めた。小泉はゼエゼエとその場に手を突いて呼吸をひとまず整えた。

「.....ゲホッ！ うう、くそ.....き、君は誰.....というかここはどこ？ そして何で俺はこんな目に遭っている??」

「お兄さんが本来はここに入るべきではない、大人だからだよ」

その見た目年齢（お面のせいで顔だちそのものは拝めないけど、体型だとか声の質だとか.....）十歳前後ほどの少年は妙に冷静というか、こちら側からの質問を予想しきっていたかのようにするすると答えたのだった。梯子を片して、少年は小泉へと向き直る、

「そ、そうだ.....さっきのガキども大人は殺すだとか何だとかおっかねえ事言ってた.....どういう事だ？」

「——ここは子どもがえらい国だからね。子どもの身分が高いんだって、大人は殺されるか奴隷にされるか玩具にされるんだ」

さらっと何か恐ろしい事を話したが、疑うのもはや億劫になってきた。小泉はとりあえず頭ごなしに否定するのはやめておき、とりあえずその話を信じるとしてみて話を続けた。

「そ、そんな街が存在してるなんて聞いた事ないけどなあ？ この東京に」

「認知されていないだけで閉鎖された村や集落なんていくらでもあるよ、この世界には」

「馬鹿な.....、だって電車が通過する場所だぞ？ 寝過ごしてこんなところに来ちゃった失敗談なんか聞いた事もないわ」

「それは知らないけど——お兄さんが呼び寄せちゃったのかもしれないね、この街を」

「は、はぁ？」

「お兄さんに隙があったんじゃないの、っていう事」

少年の一言に何故か言い返せなくなり、小泉は続く言葉を見失う。と、そこでふと素朴な疑問が浮かぶ。

「ちょ、ちょい待ち。子どもが権力を持っててまァ大人は邪魔な世界、というのは分かった。じゃあ君にとっても俺は邪魔な存在？」

「うん.....、多分そうなるんだろうけど僕はお兄さんを殺したり差し出したりはしないよ」

少年が首を横に振ってからそのお面を片手で持ち上げた。お面の下から現れたのは極々平凡な少年の顔立ちで、どこにでもいるような普通の男の子だったので安心した。

「ど.....どうして？ どうして俺を見逃してくれるんだい？」

「分からないけど、お兄さんの顔が好きなのかも。きちんとした大人なんて見るの久しぶりだし」

そう言って少年はニコッと屈託なく微笑んだ。

「—か、顔が好き？」

自分の顔は子どもから好まれるような顔だちであっただろうか、と思い何故か小泉は反射的に自分の顔に触れてみる。

「す、好きって多分アレだよな……ライクの方で別にラブというわけでは……」

「お兄さん、ちょっと来て。まずは見てもらわなくちゃいけないものがあるんだ」

「へっ！？—あ、ああ……でもお兄さんは明日も早いし、出来ればここをさっさと抜け出したいんだけどなあ」

「その為にも知っておいてほしい事があるから」

そう言って少年は小泉の手を掴むとその地下通路をどんと進んでいく。地下通路の中は下水っぽいその匂いが一層濃く、思わずえずきそうになった。少年の話が本当だとして、この街に大人が一人もいないのだとする。子どもたちだけで築き上げたその王国がこの街ならば、確かにこんな風にひっくり返ったおもちゃ箱のような世界なのも頷ける。

「君は……ええと、どうしてここに辿り着いたんだい？ 大人がいないのに、どうやってここに？」

「気付いたらここにいたんだ、そこはお兄さんとほとんど一緒だと思うよ」

「ふ、ふうん……」

「—まだ疑ってるんでしょ？」

「あ、当たり前じゃないか……信じられるわけがないさ」

「じゃあ、これを見てもそう言えるのかな？」

そう言って少年は錆びた扉に手をかけた。見た目に反して大して重たくないのであろうその扉は、少年一人の力でもすぐ開いた。多少、軋んだ音を立ててはいたが引き戸の先には座敷牢——と思わしきものが見えた。少年に続いて中へと入ると、それまでより一層強い悪臭が鼻を突いたのだった。

「う……何だこのくっさい……うぶっ」

「お、おい！ アンタ……、そこにいるのは……」

「—え、ええ？」

吐きそうになりながら座敷牢の方を見ると、髪も髭もボウボウに伸び切った中年の姿があった。何だ、ちゃんといるじゃないか。大人。だが、その中年の顔には目が無いのだけだ。

「ッ、……」

「が、外部からの人間か？ 今の声は確かに……」

「なっ、なっ、なん」

ひきつった声を漏らす小泉に、中年はすぐさま納得したかのように小刻みに頷いた。

「—あ、ああ。驚かせてすまない。……これはガキどもにやられてしまったんだ、驚かせるつもりじゃなかった……」

「い、いえ……あ、あのう……」

「その人も、お兄さんとおなじようにここに迷い込んで……」

少年はそれ以上何も言わなかったがそれだけで十分だった。小泉は吐き出したい程に戦慄し、顔面蒼白のままに牢屋を見た。糞尿も垂れ流しなんだろう、この強烈な悪臭。こんな責め苦しさを味わうくらいならいっそ死んだ方がマシだろう。

「そうだ、もう何年前の——いやもう何十年は経過しているのかな、時間の流れもよく分からなくなってきたな——、まあとにかく、色々あって絶望して死に場所を求めて電車で彷徨っていたら気付いたらここに……あんたもそうかい？」  
「し、死に場所！？——とんでもない、俺は只仕事帰りに呑んでくれて家に帰ろうと電車でちょっと眠ってただけだ。……いや酔っぱらって寝てるんだから『だけ』って事もないだろうけど、ええと……」  
「コレで信じてくれた、お兄さん？ この場所が嘘じゃないって」

益々混乱してくる小泉だったが、そのすぐ傍で少年が囁いた声で信じざるを得ないんだと思った。そう思うより、他なかった。

「その子から話は既に聞いたかもしれないが、ここではガキどもが国家だか王国だかを築き上げていて俺のような大人は単なる害虫でしかない。……殺されるか奴隷にされるか、とにかく大戦中のユダヤ人のように虐げられてしまう——その子だけは唯一、この国のルールに染まっていないらしく度々俺や他の大人達に手を貸してくれる。俺がここまで何とか廃人にもならず発狂もせずにいれたのはその子のお陰なんだ」  
「……」

ここまでの目に遭わされていたらいっそ狂ってしまった方が楽なんじゃないか、と思うけど、そんな考え方しかできない自分は小さい男なのかもしれない。小泉は少年を一瞥してから、また前へと向き直ったのだった。

「……俺は元々死ぬつもりでいた人間だ。だからもう、死のうとも生きようとも思わない。思わないが、あんたの声を聞く限りまだ若そうな未来ある人間がこんなところで無残に死ぬのは居た堪れない……だからその少年と共に逃げるんだ」  
「あ、あの——他にも貴方のような捕虜がこの牢屋には沢山いるんですか？」

小泉が牢屋を見渡しつつ、少し声を潜めて尋ねると中年は何度か小刻みに頷いた。

「ああ、そうだ。この部屋中にいるよ。どいつも舌を切られて声が出なかったり、死にかけていたりでまともに会話ができる奴は俺くらいのものだが」  
「……」

この部屋全体を包む強烈な匂いの正体がはっきりとし始めて、小泉は再び激しくゲロしたい衝動に襲われた。今吐いたら勿体ない、せっかく飲んできた酒が——ってそんな事はどうだっていい。小泉は振り返り、少年を再び見つめた。

「き、君は……出口が分かるの？ この変な場所からの」  
「——多分ね」  
「多分、って……」

曖昧な少年の返答に苦笑を浮かべつつも、話を聞く限り彼しか頼りになる人間はいないらしい。曲がりなりにもこの住人であるのなら、一人でうろつくより激しくマシであろう。ぴちゅん、ぴちゅん、と水音の滴るような音を聞きながら恐る恐る足を踏み出したその瞬間に突然隣の牢屋の住人の仕業であろう、突然の轟音にびくついてしまった。

「今度は何！？」  
「うううううっ、ンンンンウウウウウウッ」

牢屋めがけてタックルをかましてその人物だったが、ガリガリにやせ細った丸裸の男のようだ。頭髪は一切なく、その細い身体のどこにそんな力があるのやら全身でぶつかってきているのだった。

「このおじさんも一緒。でも、とっくにおかしくなっちゃったんだって」

勘弁してくれよ、と思ったけど泣き言を漏らす暇さえ今は惜しかった。少年の隣に並び、小泉はへっぴり腰で彼についてゆくしかない。

「そ、そういえばさ」

「え？」

「君の名前、聞いてもいいかい？ 俺の方も呼び名があった方が便利だし」

どことなくこの空気を少しでも変えたくて、小泉が少年に問いただしてみた。少年は俯き気味にややあってから口を開いた。

「.....はるや」

「そっかあ、ハルヤ君っていうんだ。俺は一一」

「お兄さんの名前は別にいらないよ、お兄さんって呼ぶから」

「あ、そ、そう」

随分とアッサリ切り返されてしまい、カクンと肩を落としてしまう。と、へこんでいる場合じゃない、少しでもこの謎についてはっきりさせておかないと。

「ハルヤ君はどうしてここにいるんだい？ それにほかの子どもとやらも.....何だってそんな物騒な子達が集まるんだよ。捨て子とかの集まりなのか？」

「ううん。違う.....と思う。ある意味ではそうかもしれないけど」

「？」

「.....僕にはちゃんとお父さんもお母さんもいたし、捨てられたとは違うんだけど。僕は理由があってこの街にいるんだ。だから他の子どもと違って、大人を憎んだりはしてないよ」

小泉はその言葉の意味を彼なりに追う事で必死で、ハルヤが親について過去形で話している部分には気付かなかっただけだ。

「理由って？」

「妹を探してるんだ、この街のどこかにいる筈なんだけど」

「妹を.....はぐれたのかい？ こんな物騒な街で」

「うん。一一妹も子どもだから、危ない目には合わないと思うけど心配だから」

「いくつくらいなの？ 妹さん」

「まだ小さいよ、ヒナっていうんだ」

ハルヤはそう言って妹の事を思い浮かべているのか、ほんの少しだけ柔らかな笑顔を浮かべたのだった。しかしそんな小さな子とはぐれてしまうなんて余計に心配だろう、早いとこ見つけ出さねばなるまい。

「ハルヤ君、俺もヒナちゃん探すの手伝うよ。ヒナちゃんの特徴とか.....」

「お兄さん、ちょっと立ち止まって」

言うなりハルヤが背後から小泉のスラックスを引っ張って止める。

「え一一」

「足元、見て.....カエルや虫がたくさんいるよ」



ハルヤが指差したその先を見て鳥肌を立てたのは言うまでもない。床一面、真っ暗で見えなかったが汚れかそういう模様なんだとばかり思っていたそれらは全て、今しがたハルヤが口にした有象無象の集合体だったというわけである。

「ぎえっ……」

「あ、あのカブトムシにリボンが巻いてある。もしかしたらどこかの籠から逃げ出したのかな……セミやザリガニやカエルなんかを沢山飼ってる子がいるんだよ、全部に名前をつけて自慢してた」

「う、うわぁ！ そんなの触ってこっちに向けなくてくれ！」

ハルヤは怯える様子もなく、子ども特有の無邪気さで足元の小さなカエルを掴んでみせた。それを持ったまま振り返るものだからぞっとして、小泉は思わず身をのけぞらせてしまうのであった。

「……何で？ 怖いの？ 毒もないし噛んだりしないよ」

「こ、こ、怖いっていうか気持ち悪いじゃん！ 無理！」

「ふーん」

そう言って不思議そうに首を傾げた後に、ハルヤはカエルを逃がしてあげた。

「僕も平気で触れるのに、お兄さん何だか女子みたいだね」

「む、昔は触れたんだけどなあ。大人になってくると気持ち悪くなってくるんだよ、今じゃセミもちょっと抵抗ある」

言ってからそういえば、と小泉は思った。昔はカエルなんか見つけたら大喜びで捕まえに行ったものだが、成長するにつれて嫌悪感を持つようになってしまった。今では見るだけでもゲツと思うようにさえなった。

「そうなんだ、大人になって出来なくなる事もあるんだね」

「……たくさんあると思うよ、ハルヤ君も大人になれば分かるだろうけど」

「でも虫好きだから、触れなくなるのは寂しいなあ」

「逆に、大人になったら出来る事もいっぱいあるんだよ」

発言してから小泉は、つい先程までは子どもの頃に戻りたい戻りたいと強く願っていたのになあと思い苦笑してしまう。この街——もといこの『世界』に迷い込んでしまったのも、そんな風にグダグダと考えていたせいなのかもしれない。ハルヤに最初の時点で宣言された「隙があった」、というのはそういう事なんだろうか……。

「でも、僕は大人になれないからいいよ」

「……え？」

「お兄さんも薄々分かってるんでしょう？ この場所がどういう場所なのか」

「……」

何故だか、言葉が出てこなかった。

「ここにいる子達は僕やヒナちゃんみたいに、ちゃんとお父さんとお母さんがいた子が少ないんだ。だからお兄さんみたいな大人を嫌いだって言うんだね……お父さんとお母さんの顔も知らない子もいっぱいいるし、知っていたけど殴られたりご飯をもらえなくて死んじゃった子もいるから」

勿論そんな大人ばかりではないだろうけど、この世界にいる子達はそれさえも知らない。知らないままに、本来いるべき筈だった場所からいなくなってしまったのだから。それも大人達の身勝手さによって。

途端にやるせなくなってきた、小泉は何か自己弁護に近いフォローを入れようとしたけどそれもやめてしまった。言うだけ無駄だし虚しくなってしまうようで、やめておいた。

「ハルヤ君、はその……どうして、ここに？」

「よく覚えていなんだ。でも、お母さんが最後に僕と、ヒナちゃんを守ろうとしてくれた。お母さんの後ろに、包丁みたいなものを持った怖い男の人がいっぱいいたんだ……それで――」

思い出しながら話そうとしているのかハルヤはたどたどしい口調でその時の事を語り始めたものの、何だか急に居た堪れない気持ちに苛まれてしまった。それ以上話させるのは躊躇われて、小泉は慌ててそれを止めた。

「ごめん。ごめんね、ハルヤ君――もう話さなくていいよ……」

「そうしてくれると助かるなあ、僕もよく覚えていないのが本音なもの」

言ってハルヤは屈託ない笑顔を浮かべるが、小泉はそれに合わせて微笑む事が出来なかった。ただただ苦い顔をして、ハルヤの背中を見つめるしかできなくなった。

「……あ、ねえ。思ったんだけど、この生き物達なんだけど――多分逃げてるんだと思うんだ。でも一体何で逃げてるんだらう？」

少しばかり考え込むような表情を浮かべたのちに、ハルヤは何か思い立ったように「あ」と呟きつつこちらを振り返る。

「大変！……もしかしたら、大人を退治するのに影鬼を出したのかもしれない」

「……か、カゲオニ？」

「そう！ お兄さん、大変だよ。オニに影を踏まれたら次は僕らがオニになっちゃう番だ」

影鬼、というと子どもの頃よく遊んだ鬼ごっこの亜種パターンか。ただの鬼ごっことは違い、掴まってタッチされるのではなくて影を踏まれたら駄目だった筈だ。大人になってからそんな遊びなんかしないし、一度ルールをおさらいせねばなるまい。

が、悠長に考え込んでいる暇さえその『影鬼』とやらは与えてくれなかったようで、自分達のすぐ背後から、のそのそとだが着実にこちらに向かって歩みを進めてくる物体Xの姿が見え始めた。その一部だけではあるが目の当たりにし、思わず小泉は本日何度目やら分からない「うげっ」という叫びを漏らしたのであった。

「な、なんじゃありゃあ……」

その異様とも言うべき見てくれ、大きさにすれば縦幅も横幅もありその狭い通路にぎちぎちと収まるくらいのサイズ。この街と同じく、ごちゃごちゃとしたその外見には獅子舞の頭部と胴体、かと思えばその隣には長い黒髪を垂らした白い衣服の女幽霊がこちらに向かって手を伸ばしており、更にその下からは人体模型が唐突に生えていて、また別の個所からは半壊したキューピー人形と日本人形が飲み込まれるように突き刺さっており、他にもナイフを持ったピエロがケタケタと笑い声をあげ、グチャグチャの肉塊部分には能面や鬼の面が埋め込まれていた。とにかく生理的嫌悪感を著しく揺さぶる、気持ち悪いそれらが一つの塊となり蠢いているのだ。

ちなみにその有象無象の集合体からは、タコ足のような触手が生えており、それを使って這うように移動しているようなのが多足性ゆえなのかこれが意外と進むのが早かったりもする――その異様すぎる見てくれに圧倒されて言葉を失っていると、ハルヤは小泉の表情から思っている事をうまく察してくれたらしい。

「あれはね、子ども達が怖いものが集まって出来た集合体なんだ。見るからに鬼って感じでしょ？」

「.....鬼どころか和洋折衷入り乱れてて無国籍な事んなってるんだけど!？」

ピエロの上げる笑い声と、何故か鈴の音や『影鬼』そのものが発しているんであろう呻き声が重なり、奇妙なハーモニーを奏でながらこちらに向かってるのが分かった。

「や、やばい! もしかして捕まるとあれの仲間入りか？」

「多分ね。とにかく逃げないと」

とは言ったものの、効率よく鬼を巻くには.....と走りながら辺りを見渡した。この地下から出てみれば何か状況も変わりそうなものだが、鏝だらけの近道を駆けながら、二人は道なりに走り続けた。何とかしないと少しずつ距離を縮められて、しまいにはしまいである。

「お兄さん、こっち！」

日頃の運動不足が祟ってキリキリと横腹が痛みだした時、ハルヤが小泉の手を引いてやはり不法投棄されたのであろうゴミの山の傍に誘い込んだ。

「と、止まっている暇なんかないって！」

「影に隠れてしまえば影は踏まれないよ」

それで忘れていた影踏み鬼のルールを全て思い出した。そういえばそうだ、影に入り込む事で自分の影を隠してしまえば影は踏む事が出来なくなる、そんな救済策があった筈だ。しかしそんな子ども騙しが通用するのだろうか？ と、思いつつここは子どもの作った世界だと思い直した。

二人してその影に滑り込むと、『影鬼』は何でこちらを探知しているのか不吉な色合いのガスを撒き散らしながらこちらへのそのそと近づき、息を殺す小泉とハルヤの前で立ち止まった。

「だ、大丈夫なんだろうなぁホントに.....!？」

しばらくの間、二人をじろじろと影鬼は眺めていたり顔を近づけたり不審げに影を見つめたりもしたがようやく諦めてくれたようで二人の横を通り過ぎて行ってしまった。反射的に息を止めていたがそこでようやく吐き出して、小泉は壁を背にしながらずるずると崩れ落ちたのであった。

「行った一一、ち、畜生.....」

「鬼は執念深いからね、今は行ってしまったけどまたいずれ戻ってくるよ。影の位置が変わってしまった頃合いを学習してまたやってくるんだ」

話しながらハルヤは山積みになったゴミの上によじ登り、天井に手をかけた。

「蓋があるよ、ここから外に出ようよお兄さん」

「あ、ああ。そうしよう。でも外に出てもあのキモい怪物.....、ええと、影鬼はやってくるんだよね？」

「うん」

あっけらかんとしてハルヤは言い放つと、苦笑混じりの顔で小泉が言った。

「でっすよね。……ハルヤ君、変わるよ。俺が君を引っ張り出した方がいいと思う」

ポジションを交代し、子ども一人の力でも持ち上がるその蓋を軽々とどかした。外の世界に出ると、小泉はハルヤの手を引いて出してあげた。

その瞬間、ガラクタが積まれたその街全体を包み込むようなサイレンの音が鳴り響いたのが分かった。

「……外は外で危険がいっぱいってわけだな……畜生」

「お兄さん、こっちに逃げよう」

ハルヤはしばらくガラクタ置き場の中で何やら物色していたようだが、すぐに振り返ると再び小泉を呼びつけた。既にいくつかの気配が集まってきていて、いびつに入り組んだ街並みを囲む。寂れた商店街のような場所に辿り着いたが、同じくその襲撃者共も続々とこちらを追っているようだった。

「いたぞ！」

「二人とも捕まえろ」

ハッキリと声が聞こえたのは無人の商店街を走り抜けている時で、小泉は頬の辺りを何かがかすめたのを感じた。遅れて痛みがやってきて、頬へと指先をやると血が付着していた。店の屋根の上に、お面をつけた子ども達がいるのが見えた。

彼らの手には何か弓矢のようなものが握られており、アレで攻撃されたんだとすぐに分かった。

「……ハルヤ！ この裏切り者！」

「裏切り者は処刑だ！」

ハルヤはそれでも構う事無く走り続けたが、やがて前方からも後方からお面をつけたその集団がやってくるのに小泉はぞっとした。

「な、なあ！」

「何だよお兄さん、早く行かないと……」

「これ多分、無理だよ。絶体絶命ってやつだよ！」

「……諦めるの早すぎるよ」

「諦める？……そうじゃない、大人だからもうこれ以上は無理だっというのが分かるの！ 引き際が分かっちゃうんだよ」

足を止めて屈みつつゼイゼイと荒く呼吸した。脚が、膝が、肺が、とにかくもう身体全体が限界だと悲鳴を上げているみたいであった。無事帰れたら、もっと運動しなくちゃならないかもしれない。

「だからこれ以上は――俺はもう駄目だ。でもハルヤ君だけなら何とか……」

「いたぞ！ もう無駄な抵抗はよせ！」

集まってくる子ども達の姿に、今度こそはもう淡い希望等捨て去ると決めた。

「ハルヤ、お前はひどいやつだ。俺達の楽園の、嚴重なルールを乱した」

「そうだそうだ。ルール違反は、罰を受けなくちゃいけないんだぞ」

「ま、待ってくれ！」

口々にハルヤを責める子ども達を遮り、小泉が叫んだ。

「違うんだよ。ハルヤ君は……ええと、その、何だ。悪くない。……俺が、えっと、お兄さんがハルヤ君を脅したんだよ。分かる？ 言う事を聞かないとこの国を壊しちゃうぞ、って悪い大人のお兄さんがね……」

相手は子どもだし、とちょっと馬鹿にする気持ち半分、出鱈目でその場を何とかしのいで見せようとするが子ども達はさしてリアクションを取るでもなくしらっとした様子で小泉の猿芝居を見つめた。お面の下ではさぞかし冷え切った顔をしているのかもしれない。

「だから、えっと……ハルヤ君の事は責めないであげてくれると、いいだけ、ど」

ハルヤを庇うようにして立ちながら小泉が妙な笑顔を浮かべていると、その恐るべき子ども達は感情の読み取れないままに包囲網を狭めてくる。

——だ、駄目だ……

そう思った時、背後の方でパンッ、と爆竹が爆ぜる時のような音がして続けざまに何か交通事故でも起きたような大きな音もした。当然みんな何事か振り返ったが、見てみれば更に驚いた。

「あ……！」

先程の地下牢に監禁されていたあの中年と、そして他の捕虜達なのであろう。どうやって脱獄したのか経緯は分からないが、さっきの小動物達の脱走を思い浮かべながら、前々から計画していた事なのかもしれないじゃないかと結論づけておいた。

長年の怒りを溜めこんでいたのであろうその奴隷達は、奇声を上げながらお面の子ども達を押さえこみ始めた。

「おじさん……っ」

「早く行くんだ！ その子を連れて……」

それでも躊躇いつつ、小泉とハルヤは彼らの姿を何度も何度も振り返る。例の両目をくりぬかれた中年が、少し悲しそうな声でそんな二人に——いや厳密には小泉だけであらう——に言った。

「これからはあんまりクヨクヨと過去ばかり振り返るんじゃないぞ、大切なのは過去よりも先の事、未来なんだ……」

「っ……」

小泉は唇を引き結ぶと、今度はハルヤの手を引っ張り踵を返した。

「こっちで道、あってる！？」

「あってるよ！ そのまま走って、駅に引き返して！」

ハルヤの声を聞きながら小泉は夢中で駆け抜けた。何故か無性に泣き叫びだしたくなったけど、大人なのでそれはやらない。

「駅にそろそろ電車が来る筈だから。それに乗ればきっと出られるよ」

「ハルヤ君はどうするんだい！？ ヒナちゃんを探さないと……」

その問いかけに答えるよりも、ハルヤが何かを見つけ出したようだった。何事かと思い正面を振り返ると、先程の影鬼が駅の前をうろついているのが分かった。

「そ、そうだ。どこか影になる場所でやり過ぎて……」

「そんな事して待ってたら電車が行っちゃうよ！……僕がおとりになるからお兄さんだけでも先に行って」

ハルヤがとんでもない事を言い出すものだから、思わず小泉は飛び出そうとするその小柄な身体を引き止めた。

「なっ……、馬鹿言うなよッ！」

「……お兄さんはまだ生きてるんだ。僕はもう死んでる、それだけの事でしょ」

「違う！　そういう問題じゃない！」

こうしている間にも影鬼だけではなく、子ども達がうじゃうじゃと追いかけてくるのが分かった。捕虜達の時間稼ぎも限りがある——小泉は首を横に振って、それからハルヤに言った。

「そういうセリフは年長者が言うものなんだ」

それから強いたように笑い、会社に行くためのその鞆を下ろすと中に手を忍ばせた。ハルヤが不思議そうにそれを見守っていると、小泉は中から煙草用のライター、そして三十路も近づきいい意味でも悪い意味でも男臭くなった身としては手放せない制汗スプレーを取り出した。

「火炎放射器でもやるの？」

「そう、ガキの頃これで遊んでてめちゃくちゃ叱られた。大人がやったら大問題だからな、合法的にコレが出来るなんてある意味ついてるよ」

小さな頃、例のゲームのキャラクターに憧れて一人旅……？　に出た時の事だった。トレジャーハンターらしくナイフを持って、そして魔石代わりに石ころをリュックに詰めて、覚えた炎の魔法に見立てて火遊びをしたのだがまあ当然叱られた。叱られるどころかゲンコツを喰らわされ、ゲームは一週間お預けとなってしまったという苦いエピソードがあるわけだが……するとハルヤは、先程地下道から出た際に漁っていたものであろう袋を手から降ろしたのだった。

「それだけだと火力不足だと思う、どうせなら火の勢いにもっとプラスして爆発させた方がいいよ」

「……え？」

「粉塵爆発、小麦粉や砂糖に火を当てると爆発するの。それでよく工場とかが爆発事故起こすってニュース、見ない？」

ハルヤが袋の中に詰めていたのは捨てられていたんであろう、小麦粉と思しきものだった。

「使えるかな、と思って見つけてすぐに掻き集めた。お兄さん、煙草臭かったからライターも持ってると思ってたし」

「お、お前……、何者だよマジで……」

その大人顔負けの冷静さと分析力に素で驚いてあんぐりと口を開いてしまう。

「お父さんが色々と教えてくれたんだ、そういう事にすごく詳しくかったから」

言ってちょといたずらっぽく笑う顔ばかりはその年頃の少年らしかったものの、やはりどこか違和感を抱いてしまうのだが、それからハルヤは袋の中身を見せながら続けざま話した。

「粉塵爆発は空中に粉が舞い散っている状態の方が起こりやすいんだって。だから僕がこれをぶわ〜って撒き散らすから、お兄さんがそこに向かって炎のスプレーを当ててくれるといいんじゃないかな」

「俺よりよっぽど君の方がしっかりしてるように思えてきた……」

どこか負けたような気になるものの、認めざるを得ないだろう。この世界で生き抜いてきたゆえの賜物なのか、そのお父さんとやらの受け売りなのか、ハルヤのそのたくましさには適わないと。

「けど、かっこよかったよ、お兄さん」

「え？」

「さっきの言葉。お父さんみたいだった」

「……君のお父さんは相当に強くて立派な人みたいだね」

「うん。世界で一番かっこいいんだ。お母さんもそうだよ、一番綺麗で優しかった」

「――そうか、そりゃあいい事だよ」

小泉が微笑んで返すと、かっこつけて持ち歩いているジッポライターの蓋を開けた。周りはみんなして百円ライターなだけにこれが割と目立ってしまうんだけど。

物陰から二人して足を進め、小泉が火の付いたライター片手に口笛を吹きつつ影鬼を振り向かせた。

「……化け物ちゃ〜ん、こっちおいでー。捕まえるならチャンスだぞ〜、と」

チチチ、と犬猫にやるように舌を鳴らすと影鬼が不気味な呻き声を上げながら振り返ってくる。

「大人をあんまし舐めんなよ。……大人はなあ、そんなモンにいちいち怖がってらんねえんだよバカ野郎。もっともっとコエーもんがあるからなあ」

とは言いつつ、やはり人体模型やら日本人形やら、よく分からない海外の祭りにでも使われそうないびつな形のマスクやら……それらが一緒くたになった姿は非常に不気味である。内心怖いのが本音だが、そんな事言っている場合ではないのだ。

「同級生が家建てた、とかこの年で独身は俺だけ、とか貯金の残額が百万切ったとか今月もまたサービス残業、とか精神攻撃の方がよっぽどゾっとするんだよ！」

「お、お兄さん分かったからもう撒くよ」

「よっしゃあ、やれ！ 盛大にやれチキショー！！」

小泉と比べるとハルヤはやはり冷静で、影鬼が動き出すより早くその袋を振り回した。空気中には真っ白なその粉塵が気持ちいいくらいに飛び散り、スモークのようなその光景が何かのライブショーのような雰囲気を行々とした。

こちらが指示するよりも早く、ハルヤは下がって姿勢を低くした。それを見届けて、小泉はギリギリまで影鬼をひきつける頃合いを見計らうよう、スプレーを噴射した。炎の霧が勢いを伴ったように影鬼の身体を包み込み、瞬間何とも言い難い悲鳴が響き渡った。粉塵によってか小爆発が引き起こされたようで、影鬼の胴体の一部であるモノ達が砕けて飛び散ったのが分かった。

「う、うおお……すげえ事になっちゃったよ」

「お兄さん、今のうちっ！」

放心している小泉とはやはり違い、ハルヤは随分と勇ましげな調子であった。炎上するその物体からは何か有毒なガスでも出ているのか強烈な悪臭が漂い始めたが、構ってられる余裕もない。口元を覆うとすぐさま姿勢を低くして駆け出したのだった。

ついさっきここを出たばかりだというのに、何だかえらく昔の話に思えてくるから不思議だ。そう錯覚してしまうくらいに色々あった、そう、色々とありすぎた――。

運動不足なお兄さんは、機敏なハルヤ君からは随分と遅れを取りながらも何とか階段を駆け上がる。いい加減、腹も脚も全身が痛くてならない。明日は筋肉痛コースだろうか……いや、最近はその筋肉痛さえも二日後とか時間差でやってくるから困る。

「お兄さん、電車来てるよ！」

「あ、ああ……良かった……ううっ」

手すりを掴みながら何とかかんとかホームに出ると、その通り見た目は普通の電車がそこに停まっていた。随分と年季の入ったおんぼろのデザインで、良く言えばレトロで趣のあるデザイン――とでも呼べばいいのか。だがしかし、あんまりにも古すぎて少々不安さえ覚える程だ。途中で壊れたりしないだろうな？　とも思うがこの際文句も言っていられない。

「はあっ……うう、もうしばらく走ったりしねえぞ」

電車内に滑り込んで、小泉は倒れかけるのを何とか踏みとどまりながらハルヤの方を振り返った。

「は、ハルヤ君……君も一緒に行こう。こうなってしまった以上、ここに留まるのは危険だよ」

ハルヤの手を引くが、やはり彼はうんとは言わない。代わりにちょっとだけ寂しそうに笑い、それから言った。

「ありがとう。でもやっぱりヒナちゃんの魂を見つけ出してあげたいし、それに僕はそっちには行けないみたい。……これ以上、進む事が出来ないから」

「……」

自分も一緒に残って探してあげよう、とは言えないのがやはり自分は何だかんだ『大人』であるという選択をしたんだという事なのだろう。

「――それでいいよ」

そんな思考の隙間に入り込むのは、ハルヤの声だった。顔を上げると、ハルヤのやっぱり少しだけ悲しそうな笑顔とかがち合った。

「それでいいんだよ、お兄さんは正しい。大人でいる事はすごく面倒で、嫌な事が沢山だけど、でも前に進まなくちゃいけないんだと思う……お兄さんは凄く立派なんだよ」

「……そうだな。本当にそう思うよ」

何も言えない気分させられて、きっと自分なんかよりもこの子の方がうんと立派だと思った――俺はまだまだやらなくちゃいけない。俺だけじゃないんだ、みんな面倒だけどそうやって頑張ってるってのに。

「だから俺は――もうちょっとだけ前を見るようにするよ」



「うん……、あんまり悲観的だと、また呼び寄せちゃうよ。こういう世界は結構隣り合わせにあって、考え込むと引き寄せちゃう事もあるんだからね」

何故か漠然と、別れの時間が近いと直感した。そう思うと胸が締め付けられて、小泉は自分からハルヤに手を伸ばした。ハルヤもその手を握り返すと、目を閉じて名残惜しそうにその手を両手で握りしめた。

「……さようなら」

陽が昇りかけているのか、辺りに光が差し込み始めるのが分かった。その瞬間、不思議な思いに囚われた。只々場違いな静寂が、自分を満たし始めていた。呼吸の音も、ハルヤの手から伝わる体温も、そして何故か涙に喉を震わせる自分の情けない嗚咽も、ホームの階段を駆け上ってくるその子ども達の気配さえも一一全てが遠ざかる。

「――大丈夫。君はきっと、妹さんに出会えるよ。そして君の大好きなお父さんやお母さんともいつかちゃんと出会える筈だ」

口に出したかったのだけど、もう十分な時間が残されていないと思った。それから、その失われていた感覚が戻った頃には自分の身体を揺さぶる誰かと目が合った。

「……あ、れ？」

「おお、起きたか」

「ちょっとお兄さん、こんなところで寝たら死んじゃうよお。こんな寒い時期に」

さっきまで呼ばれていた筈の「お兄さん」とはちょっと違う響きの、幾分か野太くなったその声の主――小泉がガバッと身を起こすと、どうもベンチの上らしい。先程、女子高生に罵られたその場所ではないか。制服を着た警察官一人と、そのすぐ隣には自分を見つけて交番に駆け込んだんであろう中年のサラリーマン風の男の人が立っていた。

「大丈夫？ 自分の名前言える？――ありゃ、ちょっと酒臭いねえ」

慌てて自分の鞆を手繰り寄せて中身を見ているが、財布とスマホはきちんと存在していた。財布の中身もどうやら大丈夫そうだ――と胸を撫で下ろした。

「そこまで思考がハッキリしてんなら大丈夫そうかな？」

「あ、す、すいません……泥酔して寝てしまったみたいです」

「この人が知らせてくれたんだよ、感謝しないと……って、お兄さん何で泣いてるの？」

言われて初めて気が付いた。小泉が指先で頬辺りを摩ると、確かに自分の頬が濡れている。

「――、何ででしょうね？」

「……ま、気を付けて帰ってよ。終電もうなくなっちゃってるし、交番すぐそこだからタクシー呼んであげるからさ」

平謝りしつつお巡りさんも大変だなあ、と心の中でちょっとばかり同情したい気持ちにもなった。自分のような酔っ払いを相手する事もきつとしょっちゅうなんだろう、随分慣れた感じの対応である。

「立てる？」

「は、はい……あの、すいませんでした」

続けざまにサラリーマンに尋ねかけられて小泉はベンチから立ち上がった。

「いや～、驚いたよ。タクシーで帰ろうか電車で帰ろうか迷いながら何となく立ち寄ってみたら」

「す、すみません……いい大人が恥ずかしい」

そのセリフ回しに何故か唐突に言いようのない喪失感のような、倦怠感のような――でもとてつもない懐かしさを覚えたのだった――いい大人、という。

「あ、お礼と言っちゃ何だけどさ。ちょっと火持ってない？ 俺はちょっと一服してその辺で適当にタクシー拾って帰るから。さっきから吸いたくてたまんねえ」

言うなりに中年はコートの中からおもむろに煙草の箱を取り出した。

「オイル切れちゃってねえ、家に帰ったら沢山あるからコンビニで買うのもシラクだなーって」

小泉が鞆の中にいつも忍ばせてあるはずの、ジッポを探し出そうとする。

「あれ？」

「どした？ 持ってないのか」

「い、いえ……あれ、ポケットにしまったのかな？」

鞆にないと知るや、小泉は慌ててコートやスラックスのポケットをまさぐり始めた。

「何だあ、持ってないんじゃないの」

「お、おっかしいな～……どっかに忘れてきたのかも」

「……まっ、よくある話だな。いい加減俺も控えろって事かねえ」

小首を傾げる思いがしたが、先程居酒屋で飲み潰れていた時までは吸っていた筈だしあったと思うのだが。酔っぱらって店に置いてきたか……？ しかし駄目だった、何だか記憶が全然ない。ないんだけど、何故か胸に込み上げているのは奇妙な寂しさと、何故かとても誰かに感謝したい不思議な気持ちだった。これが一体誰に宛てた気持ちなのか、思い出せなくて歯痒いんだけど。

「しかし兄ちゃん、アンタ若いなあ。泥酔して駅で寝るなんて俺もよくやったよ。記憶が全くないんだ」

「お……、お恥ずかしい限りです……」

「しかしまあ、そういう事を繰り返して人間ってのは大人になるってなもんだ」

「――もう年齢的には大人なんですけどね、十分」

「俺から見りゃあまだまだガキだっつんだよ、若い若い！ 世間的には若輩だよ」

砕けたべらんめえ口調であっさり切り捨てられてしまい、何だか気恥ずかしさが急速に込み上げてくるのだった。きっと自分はまだまだ若造で世間知らずで、至らない部分だらけなのだ。いい大人の見本とはてんでかけ離れているんだろうけど、それでもやっぱり進むしかない。

いつか、親になれた時にその子にとって世界一カッコいいお父さん、なんて言ってもらえるように努力しようと思う。

――さあ、明日も仕事だ……



～僕が××工場にいた頃の話～



某年某所、とある工業地帯に古くからある『食品』製造会社。場所の詳細は詳しい、不明。

さまざまな工場の建ち並ぶ、朝だと言うのにどこか薄暗い街並みを伊沢は自転車で走っていた。そこいらの工場の機械が立てる騒音は、初めこそやかましく感じていたのにいつの間にか鼓膜が慣れてしまったみたいだった。伊沢の主な仕事内容は、運ばれてくるものを箱に詰めたり梱包したり、そのための容器を用意したりする、ただそれだけの単純な作業であった。

実に簡単な仕事で、どちらかという頭を使うのが苦手な自分にとっては非常に気が楽な業務である。

白衣、帽子、マスク、清潔なゴム手袋を着用のもと、入室前のエアシャワーによって埃や粉塵等を払い落とす。入室後の手洗い、消毒も絶対に怠ってはならない。

「おはようございます」

今日も、仕事の始まりだった。既に、一日の作業は始まっていた。自分も急がねばならない、伊沢は消毒を済ませると持ち場へとついた。

「おはよう伊沢。せっかくの休日なのに台無しだな」

話しかけて来るのは職場で唯一の同年代である堀澤だった。

ちなみに伊沢は大学を今年卒業する歳である。大学には一年浪人してほとんど死ぬ思いで入学した。だから今年中には必ず就職を決めたい——これ以上、両親に迷惑はかけられないから。

そして堀澤の方は、専門学校へ入学したものの中退してからはアルバイトを転々としている典型的なフリーターだった。やりたい事は、いつ聞いても『特に無し』……、ちなみに彼は現在二十二歳で、まだ若い。今からでも十分やりたい事を見つけれられる年齢だと思うし、別に焦る必要は無い——とは思うのだが。

「伊沢、この前のコンパの子とは上手く行ってないの？」

「うーん……、一回メシは行ったけど。なーんかそれっきりだったなあ〜」

淡いクリーム色をした番重（ばんじゅう）の中には、工場から運ばれてきた『もの』が入っている——何かのすり身であるという事以外は一体これが何なのか知らない。全体に赤茶色っぽく、手触りとしてはハンバーグをこねている時に近い。自分達はゴム手袋を着用したその手で、それらを手に取って、ちぎったり、丸めたりしながら並べて行く。

——いったい、何なんだろうな。これ

誰しもが疑問に思うのだが、それを口にはしない。それが面接時に採用条件の一つとして差し出されたルールなのもあったし、ほぼこの責任者のような存在である専務が実に鬱陶しい存在なのもあった。

「見ろよ。あの専務、また目を光らせてるぜ」

堀澤にこっそり耳打ちされて、ちらっと背後を見ると薄汚い白衣とエプロンを着た専務（噂によるともう五年は洗っていないんだとか……なるほど、確かに近づくと悪臭がするな。あれ。それにもはや白衣とは呼べない色をしている）が腕を組んでバイトの女の子をじっと監視してる。

はっきり言ってこの専務は最低・最悪なおっさんだ。女の子には平気でぎりぎりのセクハラを働かし、男相手にはパワハラ三昧だった。給料のピンハネ、タイムカードの捏造は勿論、休日手当や残業手当を平気でごまかしたりもする。何も言わずにボーナスを丸ごとカットする事くらいは珍しくも何ともなかった。

社長ではなく何故この専務が権力を持っているのかと言うと、社長はとうの昔に亡くなっており、その奥さんが社長の肩書を受け継いでいる。

ちなみに奥さん、もとい社長は足腰の悪いもう米寿を過ぎたおばあさんだ。この会社の二階で暮らしていて、足が痛いからと言ってほとんど部屋から出て来ない。社長の座を継ぐはずだった孫も、どういうワケなのかその跡を継いでいない――まあ、これに関しての話はひとまず置いておき。そしてその社長の娘婿が、このロクデナシ野郎である専務である。動けない社長の代わりに働く……というよりは好き勝手にやらかしているといった方がいい。

専務は腕を組んで、そのアルバイトの女の子（確かまだ女子高生だ、入って日が浅い）の動向をじいっと見つめている。――まあた犯すみてえな目つきで見てやがる……

専務はのしのしとその女の子に近づいて行ったかと思うと背後から手を回してその子の手を掴んだ。

「手が遅い！ そんな事してると日が暮れる。いいか、ちゃんとかうやって……」

女の子の手首を掴みながら専務はレクチャーという名目のもと、色々な場所を好き勝手触っている。可哀想に、おとなしそうな女の子は何も言い返せない。その目が今にも泣きそうに潤んでいる。自分も含めてだが、周りは皆見て見ぬふりだ。というかこの職場そのものの空気――がそうさせるのか皆疲弊しきっていて、何も言わない。

――そうだ。この会社、空気が淀んでいるんだ。吸い込む空気全てに黒っぽい色でもついている感じだった。ここは目には見えない悪意、憎悪、欲望が渦巻いている空間だった。肺の中はどんよりとした空気で満たされて、いつしか負の感情でいっぱいだ。

みんなみんな、死んだ魚みたいな目をして「とりあえず」働いている。

それなのに何故か辞めない――、辞められない。それぞれに、様々な理由があった。亡くなった、先代の社長に恩義を感じているからとか。この不景気で職が見つからないだけとか。辞めようにも辞めさせてもらえないとか。伊沢のように今辞めるわけにはいかないとか……そもそも自分は何故ここへアルバイトに来ようと思ったんだろう？

その理由ははっきりとは思い出せないから不思議なものであった。

「見ろよ、専務の奴。今度はおでぶちゃんに絡んでやがるぜ」

堀澤はよく喋る奴だ、そんなに口を動かせるなら手の方も動かして欲しいものだ――と時々思うのだが。ちら、と伊沢が視線を上げた先にいたのは配送担当の男性社員だった。まだ三十代前半にしてはかなり出たお腹と、まるで巨大な駒を思わせる身体つき。

仕事の出来ない彼は、専務にとっていい憂さ晴らしの道具であった。

彼はその若さにして糖尿病を患っているらしく、その影響で片目が見えていないそうだ。しょっちゅう運んでいる物を落とすのだ。今朝も、どうやら何かしでかしたらしかった。その事でぶちぶちと専務の執拗な言葉責めにあっているらしい。

そりゃミスを連発する彼も悪いかもしれないが.....専務だってあまりにもしつこいし、元より彼を雇ったのはお前だろうに――ちゃんと教育してやらないアンタにだって責任はあるよ、と伊沢は思った。

「あのおでぶちゃん、多分包茎だろうな」

ケラケラと隣で堀澤が笑った。

――どうだっていいよ.....。そんな事は

グチョグチョと、赤いすり身をこねながら伊沢は思った。

「見るよ、でぶ君の悲しそうな顔。あのでぶ、何て言うかでっけえチンポが歩いているように見えるんだよな」

堀澤が喉の奥で可笑しそうにくく、と笑った。堀澤の悪意たっぷりの言葉は極力耳に入れないようにしているのだが、これには少々なるほどな、とってしまった。いわゆる下半身デブというその体型のせいと、盛り上がった後頭部の肉。背面から見れば腰から下が睾丸のようで、頭のてっぺんなんかは亀頭を彷彿とさせる。

腹の肉のせいか膝をあまり持ち上げない、地を這うようなその歩き方も相まってか何だか出来の悪い、それもとびっきり下品な粘土アニメでも見せられている気分だ。男性器型のクリーチャーが今宵も女性を食いまくる！――そんなところか。伊沢は鼻先でそんな自分のアホくさい想像を笑って見せた。

「あもう」

そんな馬鹿みたいな想像を膨らませていると、突然声がかけて急速に現実へと引き戻された。その、『男性器クリーチャー』と不名誉な陰口を叩かれた張本人である彼が目の前にやってきていた。番重を抱えた彼は、何故か申し訳なさそうしている。

「え？ あ、はい.....何か？」

「せ、専務にこっち側を手伝えと言われたので、手伝います.....」

ぼそぼそと随分小さな声で言うと、彼は目を合わせないようにこちらの作業へ割り込んでくるのだった。その体型のせいで、両隣にいた人達がそれぞれ幾分か迷惑げな顔をさせたが本人は構わずその手を動かし始めた。自分の隣で堀澤が笑いを堪えているのに気付いて、何だか嫌な予感がしてきた.....。

「あの、そういえば彼女とかっているんですか、今」

「.....え、お、俺？」

彼が顔を持ち上げると、堀澤を不思議そうに見つめた。真正面から顔を拝む事ってそういえばあまりなかった、と今ふっと思った。片目が見えていないという話は本当のようで、確かに左の目だけが極端に細い。

「そうっすよ、他に誰がいるんすか」

堀澤の口調は敬語ではあったが完全に舐めきったそれだった。何だか急にムカッとして、伊沢は足でも踏んづけてやるべきか迷ったのだがもう少しだけ様子を見ておく事にしておいた。

「い、いないけど」

「へえー。……あ、じゃあ、アレっすか。今まで彼女とか出来た事は？」

「……な、ない」

「え、そうなんですか！ 意外ですねえ何か！ じゃ、女の子と手とか繋いだ事もないんすね～……ぶっちゃけそれじゃあ溜まるんじゃないんですかぁ？ 一人でやってても寂しいだけっすよね。ちゃんとした生身の女とやりたいと思うでしょ？」

益々調子に乗ってきたのか軽口を超えてとんでもない失言を叩き始める堀澤に、いよいよ伊沢が止めに入る。

「おい堀澤、黙って仕事しろよ」

「何で女作らないんですか？ 今度俺がコンパとか開きましようか～？ ヤリコンとか全然開きますけどー」

「い、いい……そういう事すると病気になる……」

いい加減にイラついてきて、伊沢は思い切り堀澤の足を今度こそは踏んづけておいた。当然叫ばれたけれど、知ったこっちゃないと思った。堀澤の言葉はそれ以降、一切無視した。

目まぐるしい午前の作業が済むと、ようやく休憩の時間が訪れる。この地域一帯に鳴り響くのは十二時のサイレン。汽笛を思わせるそのサイレンは他にも時間帯ごとに鳴り響く。そして、それを合図にして皆次々と休憩に入って行くのだった。伊沢は自分も休憩に入る前に、喫煙のために一度外へ出た。喫煙所というものは存在しておらず、裏口を出たその先のゴミ捨て場が唯一喫煙を許されるスペースだった。

コンクリートの壁に挟まれた狭いその場所には、灰皿代わりの空き缶が一つ置いてあるだけである。ゴウン、ゴウン——とこの辺一帯に別の工場から出されているのであろう機械の音が鳴り響いている。

「……お疲れさん」

先客が、そこにはいた。製造の方にいる人で、名を長谷川という。製造エリアの人とはそんなに話す機会が無く、顔を合わせる事も滅多とないのだが、たまに喫煙に現れる長谷川さんのことはよく知っている。

長谷川は、二十八歳（本人の口から聞いた）の社員だ。鼻筋の通った高い鼻と、切れ長の目元、無駄なもの一切無い顔立ち。中々の二枚目なのだが、口数は少ないし一見すると怖そうだった。そのせいなのか未だ独身で、もう長い事付き合っている人もいないらしい。

「お疲れ様っす」

軽く会釈をしてから、伊沢もその隣に腰を降ろした。煙草を一本抜いてから、伊沢はそのフィルター部分をふっと吹いた。この銘柄は、どうもスポンジ部分に葉がついている事が多かった。それを吹き飛ばすためにこうやって息を吹きかけるのが癖づいている。伊沢はオイルの少ない安物のライターで火を点けると、煙草を唇に含んだ。しばしの間その煙草を味わっていると、長谷川が話しかけて来た。とても珍しいことだった、彼の方から話しかけて来るのは。

「——仕事、楽しいか」

ぼそぼそと喋るような調子で長谷川が問い掛けて来た。一瞬だけ、伊沢は意外そうに目を丸くしたがすぐに笑いながら答えた。

「あー。どうですかねえ。正直言って楽しいとかより、ラクだなって感じです」

真面目に働いている人間からすればお叱りを受けそうなその答えにも、長谷川は口角の端にちょっとだけ笑顔らしきものを浮かべるだけだ。

「そうか」

長谷川は煙草を吸い終えると、灰皿に吸殻を捨ててすっきりと立ち上がった。

「昼からも頑張れよ」

言い残して長谷川は喫煙所を後にした。

——かつこいいよなあ、長谷川さん。顔だけじゃなくて喋り方にせよ立ち振る舞いにせよ……あれで独身のフリーって……

にわかにはちょっと信じ難いものがあった。まあ、こうやって何度か話すうちに慣れてくれたっていうのもあるから、慣れるまでは正直近寄りにくいタイプだったのも確かだ。

(俺が女だったらほっとかないのになあ～、何つって)

長谷川を見る度に思い出す——というか彼を語る上で切り離せない事が一つ、あった。先程少しだけ触れた「本来ならば社長の座を継ぐはずだった孫」の存在についてだ。あれは、ここに入って多分一ヵ月もたたないうちの出来事だ。

伊沢がいつものように入社し、自転車を停めていた時の事。いきなりけたたましい悲鳴がしたかと思うと、工場に面した隣の家（社長の持ち家の一つだ）の中から急に人間が飛び出して来た。悲鳴は、その人間が上げていたものだった。

「やめろやめろやめろ！ 携帯はおかしな電波が出るんだぞ、見張っている！ 誰かが俺の事を見張って……おかしな電波にやられたせいで俺の頭の中が集団ストーカーにあってるんだ！ そこに毎晩車を止めさせるな、そこで俺を見張ってるのは知ってるんだぞ～～ばかやろう～～～！」

「——？」

わけのわからない事を叫ぶその男は——白衣の人間、すなわちこの社員達に取り押さえられていた。突然のその出来事に呆気にとられ、目を細めながら伊沢がその集団を見つめた。

「離せ～！ 俺の頭の中を覗くんじゃねえ～～！ お前らみんなぎたぎたにしてやるぞー！ バーローこんちきしょうめ」

暴れるその男は、真っ白な髪の毛をしていてその両手には何故か白い手袋がはめられていた。白髪だったせいで分からなかったのだがこの男は多分まだ若い……ひどくやつれて、老成した感じはあるが。

「おい、薬どうしたんだ？ 薬は！」

「知らねえよ、あのクソババアが昼飯に入れ忘れたんだろ！」

取り囲む集団が、確かそんな風に話していた。

「大いなる力の到来だぞ～！ ハルマゲドンがくるぞ～！ お前らみんな塵になって死んじゃうんだぁあー！」

「もういいから黙らせてくれ！ 耳障りだし、何よりも専務の機嫌がまた悪くなるだろう！」

なにぶんあまりにも異様なその光景に、しばし圧倒されて伊沢は立ちつくしていた。担いでいたメッセージャーバッグの



紐を握り締めながら茫然としていた。

「あ……」

ようやくそんな伊沢に気がついたらしく、取り囲んでいたうちの一人が声を上げた。

「あ、お、お……疲れです」

気まずそうにとりあえず挨拶をすると、向こうもいささか気まずそうに頭を下げてこちらを避けるようにしながら家の中に引っ込んで行った。その間、取り押さえられた男は何故かずっと「怖い」を連発していた。

「……。何だ、今の……」

後から聞いた話によれば、それが社長の孫で長男、本来社長の座を継ぐべきだった彼だと言う事が判明した。この家にずっとこうやって引きこもっていたらしい。

その光景を目にするまで、伊沢はこの家に孫がいることすら知らなかった。入って二日目くらいの時、社長の娘で、あのアホ専務の奥さん（すごい美人で、すらっとして細い。若い頃なんかさぞかしモテただろうに……ぶっちゃけあのクソ専務には勿体ない）と話す機会があった。

「伊沢くんは実家暮らしなの？」

確か後片付けをしていた時だ。突然、話しかけられて驚いた。どぎまぎとしつつも伊沢が答える。

「あ、そ、そうです。はい。早く自立しなきゃいけないんですけどねー」

あはは、と付け加える様に笑うと奥さんは優しく微笑んだ。それなりに年くってるけど、正直めっちゃ美人だと思う。下品な言い方だが、十分ヤレル。

「兄弟は？」

「あ……兄が一人と姉が一人。姉はもういい歳なんで結婚して、さっさと実家を出てきました。で、兄の方はこれまた俺とおなじでずーっとふらふらしてて」

「ふふ、そう。いいんじゃない？ 男の人は、そんなに焦らなくてもいいわよ」

「そ、そうですかねー。あ、あの……えっと、奥さんは、子どもとかいらっしゃるんですか？」

奥さんという呼び方もふさわしいのか分からないがとりあえずそう呼ぶと、奥さんの顔が一瞬だけ硬直した……かのように見えた。

――あ。まずかったかな？

やはり失礼だっただろうか、と思うが奥さんが戸惑ったのはその部分ではなかった。当時の伊沢が気付く筈もないが。

「いないわよ。うちには」

「はあ……」

奥さんの顔には元の笑顔が戻っていたが、何だか恐ろしくなってそれ以来奥さんとは微妙な距離を保ちつつ会話するようになった。そして続くある日の事だった。隠された孫の存在を知りつつも、極力関わり合いにはなりたくなかった。伊沢

はロッカールームを出て、ゴミ捨てをして帰ろうと思っていた時。製造の人は朝の出勤が早いので帰りも早い、その筈なのに長谷川がまだ帰っていない。

ゴミ捨て場から立ち去りかけた時、長谷川が隣接されたその社長の持ち家の方へと歩いて行く姿が見えた。

「.....？ 長谷川さん？」

なぜ、そっちへ向かう必要がある。

面倒事には関わり合いになりたくないとは思いつつも伊沢はその後を追いかけた。相手が長谷川だったせいなのもあるかもしれない。階段を上って行く長谷川の後をそっと追いかけた。足音をたてないように、そろそろと追いかけてみると何か囁り泣くような声が聞こえて来た。思わず姿勢を低くしてしまった。

「――さん、.....か」

(何だ?)

泣いているのは、多分長谷川だった。長谷川は部屋の扉の前で座り込み、そして泣き崩れている。扉に手を突きながら、何か泣言をこぼしているようだった。

「どうして.....、どうして、開けてくれないんですか」

確かにはっきりと.....長谷川はそう言った。

「慎二郎さん、俺は.....本気であなたの事が」

思わず叫び出したくなるのを伊沢は慌てて抑え込んだ。

(何.....、なんだって？ 今.....)

部屋の扉の向こうには、きっと例の引きこもりの孫がいるのには違いないが.....。二人が一体どういう関係なのか、たったそれだけの現場を目撃したくらいでは何が起きているのかわかりもしなかった。

そしてそれに関して尋ねるような真似も、出来なかった。それ以来、長谷川という男について甚く興味を持つようになってしまった。いや、もっと詳しく言うと長谷川と、その例の引きこもりの孫との関係だとか。極力面倒事には関わり合いたくないが、何だかひどく二人の関係性に惹かれて仕方が無かった。

喫煙を終えて、昼食を取りに休憩所へと向かう。休憩所でお茶を啜る、お喋り好きのおばちゃん集団の隣をさりげなくキープする。自慢じゃないが、この口うるさいおばちゃん達からは気に入られているので話す事はなんら問題が無い。

「お疲れさまでーす」

「あら伊沢くん。お疲れ」

三人組のおばちゃん集団が振り返る。

「あんたも若いのにこんなババアばかりの場所でよくやるよ。偉いわねえ」

「いやいや。こーんな綺麗な姉さんがたに囲まれて、こっちは大歓迎ですよ」

また、と笑いながら背中を叩いてくるのはこの中では一番お喋りなおばちゃんだ。お喋り好きの彼女は当然ながら色んな噂も知っているし、色々と聞きだすのにはもってこいの存在であった。

伊沢は得意の喋りを活かして例の孫についてそれとなく問い掛けてみることにした。

「ああ、慎二郎のこと」

「そうなんですよ、全てが謎に包まれてるっていうか」

「――まあ、ねえ」

そこでおばちゃんは湯呑に注がれていた熱いお茶を一口啜った。

「昔はあんなに可愛かったのねえ」

しみじみとそう話すのは、三人の中で一番長いおばちゃん（いやもうおばあちゃん、と言っても過言ではない年齢だろう……）だ。長い事勤めているだけあって、一家との付き合いも深いのだろう。その辺の事情なんかはこちらの方が詳しくさうだ。伊沢が興味深く聞き返すと、おばちゃんは同じようにお茶を啜ってから続けた。

「スラーっとして、背も高くて。綺麗な顔してたのよ。お母さん見てたら、分かるでしょうけど。礼儀正しくて本当にいい子だったのだけれど」

おばちゃんは過去形でそう言って、昔を思い出しているみたいに目を伏せた。

「たまーに、掃除に来るおばあさん見たことない？ 背の低い、社長くらい腰の曲がったおばあさん」

突然のように振られて伊沢はしばし考えを巡らせた。

「ああ～。……いますね」

思い浮かぶのは、青いポリバケツを片手にゴム手袋をした両手で会社内をうろうろと徘徊している小柄なおばあさんの姿だ。年齢は多分、社長と同じくらいだろうか――もう年齢も年齢だし、まともに動けないのもあるのだろう、そのおばあさんに掃除を任せると更に汚くなってしまう事で有名だった。

「あのおばあさんがね、社長が動けない時は代わりにご飯を作って運んでるのよ。最近しょっちゅう来てるからよーく観察してみなさいな」

「ご飯を？ けどあの人、掃除だつてろくすっぽ出来ないのに。出来るんすか？」

「ねえ、不思議になるでしょう。この前、どんなもの作ってるんだらうってこっそり覗いたら彩りもバランスも悪ーい……まるで鳥のエサみたいなものばかりだったわ」

そうっておばちゃんがケラケラと笑った。伊沢はそこまで、あの日初めて孫に対峙した時の事を思い出した。彼を押さえていた白衣の連中が言っていた、「昼飯に薬を入れ忘れたんだ」といった感じの台詞。

――そうか、ご飯の中に安定剤を入れて普段は落ち着かせてるのか……

昼食を終えた後、タイミングのいい事に例のおばあさんを見つけた。おばあさんはお盆を手に、おぼつかない足取りでおろおろと歩いている。失礼な話だが、大昔に何かで目にした『八つ墓村』に出てくるばあさんを彷彿とさせる。

「あの、大丈夫ですか？」

その背後から声をかけるとおばあさんがゆっくりと振り返った。返事の代わりだろう、おばあさんはニターっと歯を覗かせて微笑んだ。ただし、その歯が数本無く隙間が出来ていた。思わず苦笑を浮かべるのを気にも留めずにおばあさんはその階段を上って行った。

――鳥のエサ、かあ.....

チラっと見る限りでは、ざる蕎麦か冷やしうどんか素麺か、何か麺類のようなものが見えた。

いつものように午前中の業務を終える時間帯。終業兼昼のサイレンが鳴り響くのを待ちながら伊沢は堀澤と喋り始めた。今日は幸いな事にあのアホ専務が来ていないらしい、自由な時間を楽しめる。

というか近頃奴の姿を見ないのは気のせいか？.....そのまま一生来なければいいがそういうわけにもいかんだろう。この時伊沢は気付く筈も無かった。専務の姿も見当たらないし、同時に例の「歩く巨大な陰茎男」の姿もどこにも無い事を。

「いやあ、専務がいないと本当に気が楽だよな。好き勝手出来るよ」

「だな。このままずっと来ない方が仕事はかどる気がするわー」

そんな他愛も無い愚痴が続き、もうあと一分ほどでサイレンの鳴る頃だという時だった。一瞬、サイレンが故障でもしたのかと思った。昼食前の和やかな空気をブチ壊すが如く突然のようにその場に響き渡ったのは音階の狂ったけたたましいサイレンの音――いや恐らくこれは、人の発する声だろう。

「何.....っ？」

うー、うー、とまるでサイレンをまねているようなそのけたたましい絶叫は徐々に大きく聞こえ始めた。実に不快な、鼓膜そのものを揺るがすような嫌な悲鳴だった。感覚的に言えばちょうど、黒板を爪でひっかいている時の不快さによく似ていた。とにかくこれ以上聞いていたくないものであった。

「ちょっと何なの一体.....!？」

女の子達が騒ぎ出すのと同時に他の社員達も立ち上がり始めた。

「あのババア。また薬入れるの忘れてやがんだ、馬鹿野郎」

誰かがはっきりとそう叫んだ。おばあさんの、ところどころ歯の無くなったあの笑顔を思い出した。ざわつきだす一同を掻い潜るようにしながら走り抜けるのは――やっぱり、そう、長谷川さんだった。周囲を顧みる事もなく一心不乱に、長谷川は扉を開けて走って行った。集まる別の社員達を押し分けながら長谷川は奇声を上げるそいつ.....孫の慎二郎へと駆け寄って行く。

「ああああああ！ うー――ん――！」

慎二郎は髪の毛を掻きながら喚き散らし、壁に頭をぶつけるなどの奇行を繰り返していた。長谷川はそれを押さえながら幾度と声をかけた。

「大丈夫だから！ 大丈夫ですから.....落ち着いて」

冷静で無口な長谷川の姿しか見た事のない社員達は心底――二重に驚かされた事だろう。伊沢はまあ事前にそんな彼を目撃したことがあったためか他の人よりは冷静だったように思う。

――……

長谷川は崩れ落ちる慎二郎の姿を抱きとめながら何度も何度も「大丈夫だから」という言葉を繰り返していた。自分含めてそうだが、皆、何もできなかった。只その光景をまるでテレビドラマでも見ている時のようにじっと眺めているだけであった。

(こんな時に親は何してるんだよ？ 本来なら長谷川さんのこの役割を果たすのが親の仕事だろ……?)

どこか冷めた風に、伊沢がそれを見下ろしていた。とてつもない脱力感に全身が襲われる。悲しみやら虚脱感やらあらゆる感情が全て一緒くたにされているのが分かった。

そんな出来事があった後の、三時の、休憩。

いつもの喫煙――伊沢はニコチン切れ特有の、まるで低血糖でもおこした人間みたいにふらつくその足で喫煙所への道のりを歩いていた。

――何だ？ 単なるニコチン不足か？ それとも糖分不足？

何度も何度も襲いかかってくる眩暈に耐えしのびながら伊沢は壁づたいに歩いて行く。いつものその道のりが長くて、そして遠く遠くに感じた。歩けども歩けども、辿りつけない――おかしかった。

思い起こせばあのサイレン……、もとい孫の絶叫を聞いてからだだった。今も尚あの不愉快な不協和音が脳内と鼓膜にまざまざとこびりついているのが分かる。何とか喫煙スペースへと到着すると、そこには長谷川がいた。もうとっくに帰宅したものだとばかり思っていたのに、長谷川は腰を降ろし、且つがっくりと頭を垂れた状態で片手にはすいかけの煙草を持っていた。

「長谷川さん」

呼びかけるが、反応は無かった。

伊沢はその横に腰掛けると顔を上げない長谷川にもう一度声をかけようか迷って……やめてしまった。長谷川は多分泣いているんだろう。伊沢は無言のまま自分も煙草を吸おうと、マイルドセブンの箱を取り出した。降り出した煙草に火を灯すのとほぼ同時に弱々しい、くぐもった声が出た。

「……分かってるんだ」

ライターを降ろしながら、伊沢が視線を動かした。

「分かってるんだよ。自分だけがどれほど愚かな事をやっているのかくらい」

「……」

話のピント合わせを測りながら、伊沢は何も言わずに続きを待った。

「だけど仕方ないじゃないか……、誰だって好きになってしまった気持ちに嘘はつけないものだ。……初めて名前を呼んでもらえた時から、ずっと好きだったんだ」

正直言ってちょっとクサイな、なんて思える台詞だったにも関わらずそれは一一ひどく詩的めいたものを感じられて伊沢は煙草を吸うのも忘れて鼻を吸る長谷川の横顔を見た。

「長谷川さん。その……慎二郎さん……お孫さんとは、いつ頃からの付き合いだったんです？」

「一一ここに入社してから、ずっと。こんな言い方は酷いけれど、彼がああなる前から色々良くしてもらったんだ」

「……」

勝手な憶測にすぎないが一一きっと二人は両想い、というやつだったのだろうか。けれどまあ、あのクソみたいな父親や美人けどちょっとヒステリックな母親や……老い先短かろうが気難しい社長に挟まれて色々苦痛だったに違いない。

あんな一家が（よく知りもしないのにそんな言い方をしてしまうのはどうかと思うが、そこは容赦してもらいたい）同性同士の恋愛なんて許すわけも無い。それは……慎二郎が追い詰められていく理由の一つとしては、十分じゃないか？ 彼はきっと苦しんでいたのだろう。それはきっと自分達とは比べ物にならないほどの葛藤があって（何せあのクソ専務が父親だ。自分達と違って毎日を過ごすのだからそれはそれは辛いものだったに違いない）、伊沢では到底想像も追いつかないだろう。

そして彼、長谷川もまた苦しんでいたんだろう。それは彼の方が独りよがりの愛情をぶつけていたのかもしれないし、二人の間に何があったのかは自分の知るところではない。ただ……。

「一一大丈夫ですよ」

その背中に、そう声をかけずにはいられなかった。さっき、長谷川が慎二郎にそうしたみたいに自分もまた同じように言っていた。大丈夫だ、と。

長谷川は少しだけ悲しそうに微笑んで、それからまた声押し殺すようにして泣いていた。その背中を擦るようにして抱きとめながら伊沢は無闇に自分に何かを言いかけさせるみたいに、頷いていた。

自分は彼と違って、男ではなくて女が好きだとは思うのだけどとにかく彼の支えになりたくて仕方が無かった。それは男女の好きとは違う感情なのかもしれないが、伊沢はとにかく長谷川を少しでも助けてやりたい、守ってやりたいと、心の底から感じていた。

休憩を終え、それでも昼ごろから続く具合の悪さは相変わらずだった。こんな時は寄り道せずさっさと帰って、夕飯を食べて、風呂に入ってそれから早く寝るのに限る一一、あの奇声が変にエコーがかってぐわんぐわんと耳鳴りのように響いている。

吐き気すら催しそうになるほどだった。あまりにも悪化してきたので、少しだけ休ませてもらうことにした。

「堀澤、悪い俺ちょっと休んできていい？」

「……ああ、いいよ」

心なしか、堀澤の顔色もあまり良くないように思えた。

だが、人の事を構ってられる余裕なんてもうどこにもないくらいに伊沢はふらふらしながら救護室(とは名ばかりで、職業上夜中から作業している人の仮眠所みたいなものだ)へとその足で向かった。

横になる事一時間弱ほど、五時になる三十分ほど前で何とか目が覚めた。眠っていたところを見ると、きっと相当疲れがたまってたんだろうなと思った。というか、無闇にそう思い込むようにしていた。

伊沢は未だに不可解なざわつきを見せる脳内の中、しっかりと目覚め切らない視界で何とか起き上がった。

――ああ、早く家に帰りたい。こんな固い床の上に安いシーツが敷かれただけの布団じゃ無くて……家のベッドで眠りたい

おぼつかない足で立ち上がり、時計を見た。もうあと、大体三十分。何とか仕事を終わらせて帰ろう。早く帰ろう……。耳の中で騒ぎ続けるそのノイズは、幾重にも重なって、人々の話声のように聞こえて来た。赤ん坊の泣き声や、女の金切り声、犬の吠える声、ガラスの割れる音、救急車のサイレンの音……それらがぐるぐるんと自分の頭の中で喚き散らしている。

作業場に戻り、機械音が静かに響くその室内に足を踏み入れてからようやく気が付いた。

「……あれ？」

テーブルに手を置きながら辺りを見渡してみると誰もいない。

「何で？」

襲ってくる眩暈と頭痛のせいでまともに思い起こすことすら許されない――伊沢は何とか周囲を振り返るが、機械だけが無人にも関わらず動作し続けているのに気付いた。スイッチは入りっぱなしなのだろう、赤い電源ランプがチカチカと点滅を繰り返している。

帰ったにしても、機械をそのままにして帰るなんてまず有り得ないことだ。一度、機械にビニールのシートを被せるのを忘れて帰っただけで神経質なくらいに怒鳴り散らされた身分としてはそんな事、あってはならない。

「堀澤……」

それどころかだれもいないのだけど。

何の気なしに、テーブルの上に置かれた黄色いトレイに目をやった。作業も途中で中断したのだろうか、中身がそのままで放り出されている。

「ったく、……帰るなら最後までしていけよ」

ぶつくさと言いながらトレイの中に手を入れた。ぐじゅ、っといういつものあの感触と共に……不自然な、硬い感触がその手に触れた。

「？」

ゴム手袋のされたその手で持ち上げるとそれはガラス片のように見えた。

――こりゃ大変だ

食品の中にガラス片なんか混ざっているなんて、とんでもない。慌てて他にもそれが無いか深く手を突っ込むと、今度は大きなガラスに突き刺さったらしい。薄い手袋を裂いて血が滲んだ。

「いつう……ええい、クソツタレ」

言いながらガラス片を見ればそれは……眼鏡のようだった。

「？、眼鏡？」

何でこんなものが、と口にするよりも早く気付いてしまったことがあった。眼鏡のテンプルと呼ばれる部分……ちょうど耳にかけるあの箇所から垂れさがる趣味の悪い金色のチェーンにはひどく見覚えがあった。

「……これ、専務の？」

……そうだ。専務がかけていたあの眼鏡のデザインとまったくおんなじじゃないか！——伊沢は思わずその手から眼鏡を落とす。自然と身体が震えだすのを止めることが出来ない……いやはや、どうして。明確な答えに行きつくほどの情報も無いまま伊沢はその場から離れなくてはと思った。

「……ああああ」

ふらつく視界の中何とか脚が動きがすのが分かった。だが……、扉の前で誰かにぶつかった。顔を上げると、大きな物体がそこにいた。

大きな物体は顔に文字通りに豚のマスクを被っていた。

「ひっ！？」

一瞬豚の化け物かと思ったそいつは、ゆらゆらと揺れながらこちらへ詰め寄ってきた。豚は軍手をした片方の手でマスクを外した。

「……っ」

続いて現れたのは巨大な陰茎野郎、あの配送のデブだった。

「お、お、お前……」

「伊沢、お前、俺の名前知ってるか」

突然こいつは何でこんな事を聞いてくるのかまるで訳が分からなかった。

「し、知ってるよ……配送の……」

そこで名前が出て来ない事を知るや、デブは可笑しそうに、実に薄気味悪く笑った。

——何だよ？ 何なんだ一体？



「みんなそうなんだ。俺の事なんて『使えないデブ』とか『ブタ』とか、そんな風にしか認識していない。ざまあみろ」  
「な、なあ……みんなは……みんなは一体どこに行ったんだよ？ 帰ったのか？ 機械も点けっぱなしで」

そこで笑っていたデブの顔から一気に笑顔が消えた。デブは笑うのを止め、真っ直ぐに伊沢の方を見つめた。

「そこにいるけど」

デブが指差したのは、伊沢の後ろのテーブルだ。

「……は？」

「まずは、むかつく専務から殺ったんだ。楽しみは最後にとっておこうかと思ったんだけど、あまりにもひどい事をするものだからつい力となって最初に殺しちゃった。酷いんだぜ、専務。俺のチィちゃんにセクハラするんだからな。死んで当然だ。な？ そう思うだろ」

チィちゃん、とは例のバイトの女の子だ。それでそのチィちゃんは一体どこなんだ？ 思った。周囲を見渡した――やはり、見当たらない。背筋がぞっと総毛立つのを抑え込めない、ひどい、とにかくひどい悪寒がする。

「それで、チィちゃんもひどいんだ。俺が助けてあげたっていうのに、その事を言ったら目の色を変えてこう言った。『人殺し』、って。ひどいだろ？ ひどいよな？ 俺はチィちゃんをスケベ狸の魔の手から救ってあげたんだぞ」

ぶつぶつと唇を動かしながら、デブはその定まらない焦点のまま独り言を続けた。

「お、い」

伊沢がこわごわと口を挟んだ。デブの視線がもう一度、まっすぐこちらを向いた。唾をゴクンと一つ飲んでから、伊沢が口を開く。

「堀澤は……」

それでピンとこなかったのだろう。デブは考え込むように、黙り込んだ。それからようやく思い出したのか「あ」と言ってからまた喋り出した。

「君のお友達か！」

わざとらしいような感嘆の声を上げて、デブはそのアンパンみたいにまん丸い手をポンと叩いた。

「あいつはさあ、特にむかついてたんだよ」

「――……」

「俺が知らないとでも思ってるんだろ」

その瞬間の表情と、ワントーン下げたその声に空恐ろしいものを感じたが、とにかく黙っていた。

「ぜえんぶ聞こえてんだよ、ひひっ。いつか殺してやろう、殺してやろうって思いながら聞いてたよ。ええ。全部」  
「あ……、謝るよ――俺が代わりに謝る。あいつは馬鹿だからさ、その」

今更になって何を取り繕っているのか。こんな事を言ってもきつともう遅いんだ……伊沢はじりじりと間合いを詰めて来

るそいつから後退していくと、背後のテーブルに当たった。それで上に重ねられていたトレーが一斉にひっくり返って床に散らばった。

「……っ」

肉のすり身のようなそれは……深く考えるのも恐ろしかった。一体どここの部位だったのだろう、赤い肉に混じって爪や髪の毛が見えた。この中にきっと堀澤やあの専務も――伊沢は震える視線のまま正面を向いた。

「あ……あ、あ、長谷川さんは――」

ほとんど衝動みたいに思い出した。もう一度振り返った、転がったトレーを持ち上げた。何故あえてそれを掴んだのかどうかは……何か第六感的なものが働いたのかもしれないあるいは……逆さまになっているトレーの下から覗く目元にひどく覚えがあったからかもしれない。

トレーを持ち上げると、顔の右側面側だけがまだ潰されてない状態でゴミみたいに置かれていた。

「はせ……長谷川さ……」

喉が震えて声にならなかった。尻餅をついたままで、伊沢は目の前のバイクのエンジン音のようなものを聞いた。

「君もここに仲間入りするんだからね、いいじゃない」

「あ……ああ、あ」

「――それである専務のバカ息子の餌になるんだよ！　今までそうしてきたように！　ここに務めた人間が何故みんな辞めないか分かるかい！？　そうするとこっちの仲間入りになるからだよ！」

デブがチェーンソーを持ち上げていた。その刃が、照明を反射させながら呻っていた。

「や……、やめ……」

すっかり腰が抜けてしまったらしい、立ち上がる事が出来ない。情けない……不甲斐ない我が身を憎んだ。命乞いをしようにも声すらはっきりと出てくれないのだ。

走馬灯、とは言ったものだが思い出されるのは、子どもはいないと言った奥さんの冷たい顔、ご飯を運んでいたおばあさんのところどころ歯が欠けたあの笑顔、足が痛むと言って部屋から出て来ない社長の想像上の姿や、そして、ああそして――さっき抱きしめた長谷川の温もりと、大丈夫だからと言った後の悲しそうに笑ったあの顔と。

そして今の、もはや生きてはいない長谷川の『部品』。その顔を見つめながら無闇に思った。彼の傍に行けるのならもうそれでいいのかもしれない、と。

ゆっくりと雪片のように降りて来るその刃を見つめながらまたあのサイレンのような喚き声を聞いた。

二階ではきっと慎二郎がまた泣いているのだろう、耳を塞ぎながら。初めて彼に遭遇した日、彼が何かに脅えながら「怖い」と叫んでいた理由も今なら分かる気がする。この一家、いやこの会社はきっと、何かがおかしかったのだ。人あらざる者であったとか――推理してももう自分には関係のない事だった。

五時のサイレンと、慎二郎の泣き声と、チェーンソーのエンジン音とが重なって最高に聞き心地の悪い不協和音を奏でているのだった。

ワールド・エンド・サーカス  
World's End Circus



こんな辺鄙な田舎の町にも、サーカスが来ると聞いた時はみんなして胸を躍らせたものであった。小学校のクラスではそんな自分達の胸の高ぶりを見透かしたように、割引チケットのようなものが一人に一枚ずつ配られた。券一枚につき、ひと家族ぶんにもみ使用出来るという仕組みだったようだが実際モギリの間人はそれが本当に家族の集まりかなのかどうかなんて結構適当に判断するんじゃないかな、と今にしてみれば思うのだが。

辺鄙な田舎とは言ったものだが、何もコンビニ軒さえも見当たらないようなド田舎というわけではないし、都心部と比べたら控えめというだけでごくごく普通のよくある田舎町——といったところだろうか。そんなありふれた町に住む、同じくありふれた小学校三年生の少年・曜一郎もサーカスの噂に密かに胸を躍らせていた。

「ホワイトタイガーだってさ、すげえな」

「本物のナイフ投げってのもそそるよな。だって本物だろ、刺さったら死んじゃうじゃん」

クラスメイト達が口々に何を見ものだと思うか、何を楽しみにしているのか、当日は誰と行くのか——等と盛り上がる中に、曜一郎もいた。だが、どこか浮かない心地であった。

「曜ちゃん、なあってば」

「え……？」

「曜ちゃんはどう思う？ 偽者だよな、このナイフ。きっと刃が引っ込むんだぜ。玩具のナイフみてえにさ」

「——そうだね」

どこか奥歯にもものでも挟まったような喋り方の曜一郎の杞憂になど、小学生時分の子どもたちは気づくわけもない。曜一郎はその日帰宅するなり、母に例のチケットを見せた。それと一緒に、「行きたい」との言葉を忘れずに添えて。

「サーカス？ そういえば最近、テレビで宣伝やってるの見るわ」

「ママ、俺も行きたい」

「……でも、喘息の発作が出たらどうするの？」

母が少しだけ心配そうに目を細めながら呟いた。それから更に被せるようにして、言ったのだった。

「また前みたいに周りの人に迷惑をかけてもいいの？」

「……」

曜一郎は幼少期から喘息を患っている。

忌々しいこの持病は事ある毎に彼を襲い、そして悩ませていた。どちらかという外で走り回っている方が好きな曜一郎にとって、突如のようにやってくる発作は頭痛の種でもあった。勿論、処方されている薬をきちんと用法を守って使っていればある程度抑える事は出来るのだけど、やはり予測のつかない事態が起きうる事だって十分にある。

母が気にしているのはその部分と、何よりも嫌がっている部分が実はもう一つだけあった。

それは自分達が母一人、子一人の母子家庭であるという箇所だ。曜一郎が生まれる前に色々あったらしく、曜一郎に現在父親はいない。とりあえず自分の存在を認知はしてくれているものの、父が会いに来た事はこれまでに一度もなかった。だから、曜一郎は父の顔を知らない。何をしている人なのかもよく分からない。どこにいるのかさえも当然のように知らなかった。

それでも母はまだそんな父、がいつか戻ってきてくれると信じて止まないでいる。曜一郎にとっては父と呼んでいいのやらよく分からないそんな存在の事を、母は今でも信じ続けているらしい。

「でも俺、行きたい。みんなと行く約束した……」

「……そう言ったってね。ママだってその日、仕事があるかもしれないのよ」

結局、周りが幸せそうな家族連れでやってくるの中に入るのが嫌というのもあるのだろう。当時はそれに気づけなかったし、何分子どもすぎたのもあってか、母のそういう心境については考えもしなかった。

勿論、母だって曜一郎の事が可愛くないわけではないしこういう場面以外では本当にいい母親だと思っている。嫌な母親だと思った事は一度たりともない。——にも関わらず、もしかすると自分は、本当ならば生まれる予定のなかった存在なのかも、とふと思う瞬間がある。

親、って一体何なんだろう。

自分は周りの子達と何が違うんだろうか。当時の自分の頭では考えてみたところで分からない事だった。

「曜ちゃん、サーカス行けんのんけ？」

「……うん」

いつものように公園で集まりながら、曜一郎が暗い顔と沈みがちな声でそう言った。

「残念やなあ」

「ホワイトタイガー、一緒に見たかったのにね」

「このチラシのお姉さんにも会いたかったし」

チラシの中央で、派手なメイクをして赤いドレスを着た女性が笑顔で写っている。化粧が派手というだけで、綺麗な大人のお姉さんといった装いだ。

「でも、しょうがないよ。ママも仕事だし」

そう言ってブランコを漕ぎつつ、曜一郎が無理強いしたように笑って見せた。

それから、会話から外れて一人でリフティングをしていた少年がとことことやってきた。かと思うと、声を潜めた調子でみんなの輪に加わり始めた。

「なあなあ」

「ん？」

「さっきからさ、あそこの鉄棒の前でぼーっとしてる奴、見覚えある？」

皆がそれで視線を合わせると、彼の言うその人物とやらを見上げたのだった。——見ればまだ同い年くらいの年頃の、確かにこの辺りでは見た事のない顔立ちの少年が一人。鉄棒によしかかって、砂場で遊ぶ他の子ども達を只じっと何にも言わずに眺めていた。

「……あいつさ」

言いながら、彼は懐にしまってあったサーカスのチラシを取り出した。くしゃくしゃに丸まったそれを広げると、チラシの隅辺りを指しつつ続けざま話した。

「こいつに似てない？」

「え、どれ？」

やや深爪気味の人差し指が示したのは、燃え盛る炎の真上、傘を差しながら器用に綱渡りをしている少年の写真のようだった。遠目の写真なのではっきりと細部にまでは判別ができないが、そうだと言われたらそうだし別人だと言われても頷けるし――まあ、どっちとも取れた。

「おい、お前」

真っ先に興味を持ったのが、好奇心旺盛な子どもであった。人見知りしたり物怖じする事のない彼は、つかつかとそんな見慣れぬ少年の前に歩いていったかと思うと目が合い頭に指差し言うのだった。

「なあなあ。これ、お前なん？」

そしてさして表情も変えないままに、少年はこちらを見つめた。ほとんど無表情気味に、少年は辺りを見渡した。それもそうだろう、当然の反応だ。お互いがお互いを知らない者同時、ワンクッションを置かずして対峙したのだから。

「そっくりなんやけども」

詰め寄る彼に悪気などはなく、只、真相を知りたいという無邪気な好奇心だけが先立っているんだろうと思う。だが、その質問に少年からの答えはなかった。緊張して喋れなくなっているのとも違うようで、口を噤んだきりであえて話そうとしないのだ。そうするとその沈黙が次第に退屈なものに感じられてきて、こちら側の熱も急速に冷めていくのであった。

「……何だよ。違うん？」

「ケンちゃん、まーた早とちりだ」

一向に言葉を発そうともしない少年に、集まっていた子どもたちも興味を無くし始めたのかつまらなさそうにその場から踵を返し始める。そんな中で曜一郎だけは、その少年の事を見つめたままだった。

特別な思いがあったわけではない、只何となく目が離せなかった。少年の独特の佇まいやその雰囲気、だけどとても神聖なものに感じられて。――曜一郎は無意識のうちにその少年と見つめ合ってしまった。

「なあ、ほんとにやるん？」

「嫌だったら帰ってもいいよ、でも先生には内緒にしてて」

サーカスの日が近づくにつれて、曜一郎は自分が行けない事にむしゃくしゃとしていた。その鬱憤を晴らすように、彼が提案したのはそのサーカス団が待機しているというテントに侵入するという馬鹿みtainな話だった。

曜一郎の話に乗った少年らも、面白半分ではきいたものの『そう上手くいかないだろう』と思っていたのだが、これがどういうわけなのかすんなりと忍び込めてしまったのだから不思議だ。初めは抵抗のあった子ども達も、そのちょっとしたスリルや背徳感を前にしては残されていた一さじほどの罪悪感も吹き飛ばしてしまう。

「すげえ……」

例のホワイトタイガーの檻は見つけられなかったが、代わりに猿の入ったケースを発見した。他にも小道具や衣装が並べられていた。そして話題にも上がった、本物か否かのナイフも無造作に置かれており、少年らは大喜びでそれに食いついた

のであった。

「かけえ、ナイフだ！」

「うお、本当だ！ ねえ本物？」

「お、おいあんまでかい声出したら……」

高揚感を抑えきれずについつい騒いでいたところへ、その訪問者は突然やってきた。

「……あ！」

「う、うわああ！？」

カーテンを開きながら、そのいつかの少年は一テントへ無断で侵入などあるまじき愚行を働いた自分達を、やはり大声で咎めるでもなくじっとこちらを見ていた。しかし、曜一郎以外の子ども達は彼がああの時の公園の少年だと気付いていないのかもしれない。慌てているのもあるが、何より少年の顔には道化師のようなメイクが施されていた。

白塗りの顔面に、目元には黒いアイラインと涙をイメージしているのであろうペイントが部分的に描かれているその顔だけを見て、瞬時に彼だと分かる方が逆に凄いのかもしれない。

「で、出たあ、お化けだ！」

「うひいいい！」

暗がりから現れたのもあって、その容姿は確かに少々おっかないかもしれなかった。蜘蛛の子を散らすように一斉にその場から逃げ出した彼らだったが、だが、曜一郎だけは少年に目と正しい判断力を奪われてしまったようにしばしその場に留まってしまっていた。

遅れて、まずい、という気持ちがやってきた。

「……あっ」

呟くと、曜一郎は何か謝罪するなり言い訳するなり一とにかく何かを言うよりもまず逃げなきゃ、と思った。だが、極度の緊張からか急速に襲ってきた胸の発作にその場にうずくまった。慌てて吸入器を探るのだが、見当たらずに益々焦り始めた。

そして、そうしている間にも少年は大声を出したり誰かを呼ぶ気配もなく黙り込んだままだ。何を思っているのか、こちらをじっと見つめたままだ。

——どうしよう、怒っているんだ……

それは二重に曜一郎を戸惑わせたのだった。相変わらず見つかる事のない吸入器に、いよいよ曜一郎は罰が当たったのだと思う。

——ママのいう事を聞かなかったからだ。ごめんなさいママ。ごめんなさい……

ぜえぜえと酷くなっていく発作の中で、少年はこちらに向かって近づいてきたかと思うと目の前でゆっくりと腰を下ろしたのだった。それから、少年はうずくまる曜一郎に向かってそっと手を伸ばした。その手が向かう先は、曜一郎が押さえている胸の辺りだった。

「……」

少年は、曜一郎のその手をそっと避けさせると今度は代わってその手の平を宛がった。すると、それまでは詰まったように苦しかった呼吸が少しずつだが整っていくのを感じた。――不思議だった。それは何かの魔法のようで、曜一郎は驚いて少年を見つめ返す。

「あ――」

少年はやはり黙ったまま、その発作が収まるのを見守っていてくれているようだった。

「……」

「あ、あの、う……」

少年がやがてその手を離したが、すっかり調子は元に戻っているようだった。嘘のように消え去った発作に、曜一郎は驚きを隠せないままに彼をしばし穴が開くくらいにまで見つめたのだが、少年はやっぱり何も言わずに曖昧に俯いただけである。

「おい、イリア。どうしたんだ？」

向こう側から呼ぶ声に、少年は伏せていた顔を上げた。それからすぐさまこちらを向いて、実にきびきびとした動作でテントの裾を引っ張ると、顎でしゃくりながら外の世界を指した。早く出ろ、という意味だろうとはすぐに察しがいった。その場に座り込んでいた曜一郎は慌てて立ち上がると、騒ぎにならないうちにとその場を逃げるようにして走り去ってしまった。それから、どのようにして家にまで帰ったか今もって思い出せないでいる。

そしてサーカスの当日、母が危惧していたよう曜一郎は前日から発作に襲われ更には発熱までしてしまった。風邪を引くのは昔からしょっちゅうで、あれから何年も経過した現在も悪い事に引きずったままなのだった。

が、風邪を引きやすいといっても社会人となれば微熱ぐらいでは休んでもいられない。風邪を引く、という事そのものがまるで『だらしない奴』という目で見られてしまうので、曜一郎は特に体調管理には気を配りがちな大人になった。

現在の製薬会社に中途で入社し、ルートセールスとして約三年程（本音を言うと希望していた職種とは違うのだが、文句も言っていられなかった）。二十代も半ばを過ぎ、きっとぼうっとしている間に三十路へと突入してしまうんだろうな――と最近では焦るところか諦めに近いような、というのも仕事に追われる日々の目まぐるしさについていくのに必死で、何というかとにかく無気力だった。

今の会社は全国転勤もあり、入社二年目で早速違う土地へと追いやられ、色々もめて結局またここへ戻ってきた。今までこの土地でしか生活した事がなかっただけに、いい機会だと思い出してみたのだがどうも馴染めなかった。……情けない話である。

せめて親元くらいは離れて自立しようと思い、現在は実家を出て会社の近くの独身寮に入る事にした。その方が近くもなかったし、駐車場代とガソリン代も浮いたし、まあトータルするとそんなに違いがなかったので別に問題はない。

「何ていうかさあ～、将来はクリエイティブな職業につきたいの。人を動かすっていうよりかは人を感動させる、みたいな？」

「何それ。例えばどんなんだよ」

「そうだなー。写真家か映画監督かア～……、あっ、小説家だな。うん。俺、作文で賞取った事あるし。けど俺が目指して



んのはオタクみたいなアニメ絵のじゃねえんだぜ。もっと芸術的なのだ、文学的とも言うかな？」

「お前、そんな事できんの？ ていうか書いた事とかあるのかよ」

「今から勉強すんだよ、今から。俺まだ二十歳だし。本も人より読むしな、スマホとかで」

帰宅途中の電車の中、大学生くらいの若者が二人そんな会話をしていたのが聞こえてきた。曜一郎は会社帰りの背広姿のままそんな彼らの会話に耳をやりながら、胸のポケットに忍ばせたスマホが震えるのを察知した。

何だろう、と見てみるとほとんど使わなくなってしまったメールの変わりに通知が入ったLINEのようだった。メッセージを送ったのは、ほとんど疎遠になっていた大学時代の友人同士で作っていたグループのうちの一人だ。

『今年の四月、嫁さんに三番目の子どもが生まれます』

嬉しそうなスタンプまで添えて、上機嫌そうに彼は今度ホームパーティーをやるから是非みんなにも来て欲しい、とのメッセージを立て続けに送信してきた。喜ばしい話なのだが、今日も定時より二時間程のサービス残業でくたくただった曜一郎は、すぐに返事する気になれず既読マークをつけたままで放置してしまった。

――ああ、何かすげえ疲れたなあ……

うっかりしていて風邪でも引かないよう気をつけないと、と思いながら、曜一郎は子どもの頃は風邪と共に喘息の発作が酷く寝込んでばかりいた自分を思い出す。小児喘息というやつだったようで、今では回復したが――というよりも、あの日……そうだ。テントに忍び込んで、あの時、吸入器をなくした時の少年との出来事。

あの瞬間から、サーカス当日の一番酷い発作を最後にして嘘みたいに発作がほとんど出なくなった。母も医者も、こんな事は滅多にないと不思議がる程だった。今にしてみればあのテントの出来事そのものが自分の妄想だったのではないかと、思うくらいに幻想的でおとぎ話のような体験で――。

極度の疲労感に苛まれつつも、電車の程よい揺れもあってなのか当時の思い出に浸りつつちょっとだけうとうとし始めていた時だった。吊革に掴まったままで何気なく見上げた広告に、思わず襲い掛かってきた眠気も吹き飛ばしてしまう。

「あ……ッ」

思わず身を乗り出して見つめた先にあったのは、その時の記憶をまざまざと思い出させるのには十分すぎる写真なのであった。そのはずみで座席に座っていた若い女性からは嫌そうな顔をされてしまい、曜一郎は小さな声で謝罪の言葉を漏らした。

が、彼の本心はもはやそんなところにはなくその写真――ひいてはポスターにすっかり奪われてしまったのであった。サーカス。ホワイトタイガー。ナイフ投げ。美少女による火の輪くぐり。双子の姉妹による空中ブランコ……それらの単語が目に入り、何故か酷く懐かしくなり、そしてそれがあの時のサーカスと同じ団体だと分かり曜一郎は益々目を皿のようにさせてその写真の隅から隅を眺めたのだった。

「……」

やはり、あの時のサーカスに違いない。だが気になるのは――、曜一郎は胸の辺りに疼く感傷めいた高鳴りを押し隠すようにし、それからもう一度ポスターを見た。怪しまれない程度にそのポスターの細部まで見つめてみるも、『彼』を見つける事は叶わなかった。

――しかし……

日付を見ればサーカスの公演はまだやっているようだ、腕時計を見ると時間的にも何とか間に合いそうである。

曜一郎は思い立ったように電車から降りた。奇妙な使命感に押されるまま、曜一郎は残された僅かな記憶だけを頼りにするよう、只ひたすらにその足を進め続けていた。子どもの頃は発作を気にしてあまり激しい運動が出来ず、かと言って社会人になってからは益々運動の機会も減ってしまったように思う。

だから少しでも身体を動かせば、次の日やそのまた次の日は筋肉痛だったりで一ーほら、今だって横っ腹が痛む。何て情けない奴。明日からはもう少し頑張ろう、明日からは.....。

やがて辿り着いた、そのやや寂れた小さなキャッスルテント。決して華やかで、大々的なテーマパークのような派手なものとは言いがたいこぢんまりとした規模のテントではあったが、曜一郎は却ってあの頃とほとんど変わらないその様子に泣きそうになった程だ。

一ーああ.....

あの時見られなかった光景が、ここにあるんだ。曜一郎は辺りを見渡してみるも、自分以外の客の姿が見られない事に気が付いた。きよろきよろと周囲を見ていると、ふとテントの前でタキシードとシルクハットで決め込んだ中年太りの男を見つけた。

背の低い中年男は眼帯をつけ、ステッキを持ちながら何やら呼び込みをしているようだった。とは言っても他に客がいないので、きっと自分の姿を見つけて始めたのだろう。男の隣では、てっぺんが二股に分かれたタイプの赤と黒のツートンカラーの帽子を被ったピエロの女性がアコーディオンをかき鳴らしている。レトロなデザインの、ちょっと古ぼけたアコーディオンはそれでもきちんと音色を奏でているようであった。

「.....さあさあさあッ、お立合い。寄ってらっしゃい見てらっしゃい。たった今サーカスの中ではいろお〜んなことが繰り広げられていますよ！ 怪力男のヘラクレスによる火吹き芸、とお〜っても身体の柔らかい絶世の美少女にして双子のヴィーナスとヴァイオレット姉妹による空中ブランコショー、盲目の猛獣使いスノー、ナイフ投げの達人アレクトー、他じゃあ中々お目にかかれませんか！ 今は何とお兄さんの為に特別席をご用意、さあさ、これはもう入ったものにしか分からない！」

「あ、ああ.....あの、それで、俺も中を見たいんだけど当日券ってあるの？」

「.....うちはチケットじゃないよ、全然売れないし紙代とインク代がバカにならないから」

アコーディオンを演奏していた女性がそんな風な夢も希望もない辛辣な言葉を吐いたので、曜一郎は思わず苦笑交じりに言った。

「じゃあ、入場料いくら？」

「大人、八百円」

実に愛想のない声でそう返されてしまい、曜一郎はつい愛想笑いで取り繕うのも忘れて吹き出しそうになったが何とか堪えたのであった。千円札を一枚差し出すと、お釣りを用意しようとする女性を通り抜けて曜一郎は足早にテントの中へと進んでゆくのであった。

中では予想通りに誰もおらず、ある意味快適だと思った。曜一郎はがらんどうのその内部、痛みや損傷の激しい年季の入った椅子に腰掛けた。今しがた言われたよう『特等席』もすっかり空っぽだったので、気兼ねせずに曜一郎は正面の座席を使わせてもらう事にする。

「.....猛獣使いのスノー嬢による、ホワイトタイガーのショー！ とくにご覧あれ〜！」

ついさっきまではシンとしていたその中が急に騒がしくなり始めたのであった。それまでは閑古鳥が鳴いているような有様だったのだけれど、曜一郎が現れたのを知るや芸が開始されたらしい。

その様子が何とも可笑しく、曜一郎は大人げなく笑いかけたのだけどそれも無粋かと思って特に反応しないでおいた。ステージの上に現れたホワイトタイガーは、もうほとんどヨボヨボに違いない。獰猛さとは幾分か程遠い印象の、随分とおとなしげな猛獣である。そしてそんな年老いた虎を操るのは幼い少女のようだ。それには素直に驚いてしまい、獣の存在よりもむしろ少女の方が気になってしまうくらいであった。

少女はまだ、猛獣使いとしての腕前の方は未熟なようで、中々虎は言う事を聞いてくれないらしい。否、少女の腕に問題があるのか年老いた虎の方に問題があるのか。鞭をしならせるも、虎はえっちらおっちらと大儀そうに歩き、あまりやる気がない。少女も虎が思うようにいかない事に焦っているようで、何度も何度もやり直していた。

(ああ、傑作だ……！)

その次に出てきたいかにもなピエロの扮装をした小太りの男は（よく見ると先程客を呼び込んでいた、タキシードの中年ではないだろうか？）曲芸を披露するも大玉から滑り落ちてしまうし、手品もことごとく失敗に終わるのであった。

自分が幼い頃に行けなかったサーカスだけど、まさかこんなものばかりを延々と見せ続けられたのであろうか……だとするならばほとんど苦行に近いだけだし、というかぼったくりだろう。何だかもういっそ大笑いしたかった。大声を出して手を叩いて爆笑し、苦しい息を嘔み殺すのに必死になった。

片手で鼻と口とを覆い、何とかして何とかしてその感情を追いやった。だけど同時に、目頭の辺りがとても熱くなってきてしまい、自分が今笑いたいのか泣きたいのか迷ってしまうのであった。

あの時、見たくて仕方のなかったもの。今自分は、あの時に戻ってやり直しているに違いない。見られなかったものが、ここにあるんだ。笑い出したいのを堪えているその中に、何とも言えない泣きべその気持ちがそっと沁み込んでくる。

「さあ、来ましたよ！ 我が団のメインイベント、スリル満点！ 落ちたら地獄の業火へと真あああ逆さま～～！ 道化師イリアによる、恐怖の綱渡り！ 目を離す間はおろか息をする間さえもありませんよ！」

大袈裟でやや芝居がかったマイクパフォーマンスの後、曜一郎はふっと顔を持ち上げ、いつかの彼を見た。あの時よりはうんと成長して、自分と同じ年頃の青年になっていたようだけど、やはりどこか浮世離れした雰囲気だけはそのままだった――。

下にはごうごうと燃える赤い炎。その上のロープを、傘を差しながら歩くその姿にしばし釘づけになった。大袈裟だと称したその司会通りに確かに目が離せない。曜一郎は、ロープを渡り切ってこちらへとやってくる彼を見つめた。向こうも向こうでそんな曜一郎の事を分かっているのか、曖昧な微笑を浮かべたままでこちらへと足を進めてきた。

「……イリア」

名前を呼ぶとそれに応じるように、イリアはもうちょっとだけ笑って見せた。

「お、お……」

駄目だ、ここへ来て涙がまた溢れ出してくる。そう思いながら曜一郎は必死に泣き止め、と言い聞かせた。いい年して、

大の男が何やってるんだよ。笑え。笑うんだぞ。まるでいじめられた子どもみたいに歪む自分の唇から、何とかして先に続く為の言葉を紡ぐ。

「――お、俺を迎えに来たんだね……？」

イリアは黙って微笑んで、そして目の前で静かに腰を下ろした。イリアはあの時と同じように、曜一郎の胸元辺りにそっと手を伸ばして触れる。いよいよ堪え切れずに、曜一郎は口元を押さえるとただただ咽び泣いた。

何もかもがあの時のままだ。変わっていない。変わったのは自分だけだ。この空間を出れば、きっとまたいつもの日常が待っているんだろう。深い夜が広がっていて、そしてまた朝が訪れれば一日の始まりだ――。

夜はどこまでもどこまでも暗い。

だけど、当たり前的事かもしれないけれど必ず朝はやってきて、いつでも自分を迎えに来てくれる。曜一郎は今度こそはときちんと笑って、それからイリアを見つめ返したのだった。



## あとがき NO OWARI

このたびは拙作、手にとって頂き読んで下さってまことにありがとうございます。

一応BLのつもりなんですけど別にこれ男女でも良かったんじゃないのかなぁと思っていますが自分、口下手なんで表現しきれませんでした。

全部の作品に思い入れがあるので一つずつあとがきを書きたいです。巻いて巻いて！



その壺：『あの顔から毛の出た猫みたいなヤツね』

タイトルにまず目がいきがちですが、母親にモンスターハンターというゲームに出てくるアイルーという猫のキャラを思い出してもらったために伝えたところ母の口から出た言葉がコレでした。

つまり意味はないというやつです。

関係ないんですけどプライドの高い人は文章に『、』を多様するきらいがあるんだらうで、昔はそうでもなかったのに年々私の文章にはこの『、』が増えていくところを見ると歳を重ねるごとに私のプライドが高くなっていっているのかな？ と思いました。

ちなみに私も吉木君と同じでヘンテコな映画が大好きです。

その貳：『少年王国の崩壊』

ホラーコメディみたいなのを目指していたんですが途中で何やら迷走しましてね。まあいいか。何というか子どものころって結構恐ろしい事も平気でやったよな～と思います。トンボや蛙が殺されても可哀想、とは世間は言わないのに犬猫や兎が惨殺されたら可哀想、とはコレいかにと思うけどまあそんなもんやね。

ちなみに小泉君が好きだったゲームとは言わずもがなファイナルファンタジー6で、トレジャーハンターのキャラクターはロックの事です。名作！

その参：『サイレン～僕が××工場にいた頃の話～』

三年くらい前にいわゆるブラック企業みたいなところに入社した時期があったのですが、その時の出来事が大きく反映されている話です。この工場は今もどこかに存在している！

当時はいつか絶対にこの会社の摘発本を出してやるんだ……と根暗な事を考える事で自我を保ち続けていましたがいざ踏ん切りをつけてやめてみれば憑き物が落ちたようにスッキリし、どうでもよくなってしまいました。

今思うとあの時の地獄の日々があるからこそこの話が思いついたわけで、失敗というわけでもなかったんだらうな。と、思うようにしています。

#### その四：『ワールド・エンド・サーカス』

最後なので気分良く終わる話を持ってきました。この話もそうですが書く時に気分を盛り上げたいのでサーカスの画像をあれこれ検索していて気付くと廃墟とか異次元系の町並みを食い入るように検索しまくってしまい無人の人工の夜景が好きなんだなあとかワクワクしてくると便意を覚えるのは何でかなあとか色々な事を考えながら書いていました。

ところで私はピエロという存在が怖いのですが、そのトラウマの要因たるや母親が見ていた『I t』という映画に出てくるペニー・ワイズというピエロの怪物のせいです。大人になってから改めてI tを見たところ後半部分のオチで別な意味でトラウマになってしまいました。あいつだけは絶許。そんな自分のトラウマもあってなのか、ここで出てくるピエロのイリアはピエロ本来に備わっているんであろう純粹さや無垢さやひょうきんさを前面に押し出したキャラにしてみました。これなら怖くない筈です。もう何も怖くない。

あとがきの書き方が分からなくなってきましたが、自分、不器用なので伝わっているか不安です。皆々様に感謝を込めてそろそろ黙ります。改めてありがとうございました！ SUKI！

**thank you:**町田ナツメ（挿絵提供◆<http://note.tre.oops.jp/>)

もずねこ（素材◆<http://mozneko.boon.jp/>)



# 特別予告

君の事、

人間界に降りた邪本が  
人間の少年と恋をして……？

禍々しい存在  
だと思っただと  
た事は  
一度も  
ありませんよ

恋の呪文はいあ！ いあ！！

アサトス様が目覚めないうちにこの恋も叶いますように  
血しぶき時々切り株な不定形ラブストーリー！

## ネクロのろまんす③



と、言うのはまあ普通に釣りなのでお前ら  
クローサーしてさっさと寝て下さい、  
風邪ひかないように温かくしてネ！！

本家：<http://nanos.jp/ukamukowai9>  
(18歳未満は禁止、BL中心)



←せんてん！

ロメロリスペクト！

きたないゾンビもの×BLで  
ひどく冒瀆的なエログロ活劇！！

文章：黒井メラ

絵：うまこ

近日電子書籍でも配信予定！

予定は未定！同情するなら金をくれ！

## アフター・ショック

<http://p.booklog.jp/book/90771>

著者：くろい

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ukamukowai9/profile>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90771>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ